

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡 2
坂長ヨコロ遺跡
坂長熊谷遺跡



2010

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡 2
坂長ヨコ口遺跡
坂長熊谷遺跡

2010

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになります。

こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところですが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成20年度に調査を行った坂長下門前遺跡・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡では、古墳時代中期の古墳や後期の竪穴住居跡などが発掘され、土器や玉類など多彩な遺物が出土し、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。そして、このたび、それらの調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成22年 3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

例　　言

1. 本報告書は「一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として実施した坂長下門前遺跡2区・3区、坂長ヨコロ遺跡1区・2区、坂長熊谷遺跡1区・2区の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に収載した遺跡の調査面積及び所在地は、以下のとおりである。

坂長下門前遺跡2区	(3,600m ²)	鳥取県西伯郡伯耆町坂長字下門前2023ほか
坂長下門前遺跡3区	(4,500m ²)	同　字下門前2017ほか
坂長ヨコロ遺跡1区	(1,000m ²)	同　字ヨコロ1888ほか
坂長ヨコロ遺跡2区	(1,420m ²)	同　字ヨコロ1887ほか
坂長熊谷遺跡1区	(2,000m ²)	同　字熊谷1854ほか
坂長熊谷遺跡2区	(780m ²)	同　字熊谷1808ほか
3. 本報告書における座標は、世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標を、方位は座標方位を用いている。また、レベルは海拔標高である。
4. 本報告書に使用した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図及び国土地理院発行の1/50,000地形図を縮小し、加筆して利用した。
5. 本発掘調査における基準点測量と方眼測量は業者に委託したものである。
6. 揭載した遺構図面は文化財主事又は調査補助員が作成と添書を行った。
7. 遺物の実測及び添書は文化財主事又は整理作業員が行った。
8. 遺構及び遺物の撮影は文化財主事が行った。
9. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 本報告書の作成は、高橋章司（坂長下門前遺跡）、坂本嘉和（坂長ヨコロ遺跡）、高橋浩樹（坂長熊谷遺跡）がそれぞれ担当した。
11. 現地調査及び報告書の作成に当たっては、多くの方々から御指導、御助言、御支援いただいた。感謝いたします。

凡　　例

1. 遺跡の略称は次のとおりとした。

坂長下門前遺跡	2区「下モン2」	3区「下モン3」
坂長ヨコロ遺跡	1区「ヨコロ1」	2区「ヨコロ2」
坂長熊谷遺跡	1区「クマタニ1」	2区「クマタニ2」
2. 遺物には、すべて遺跡略称及び遺構番号を記載している。
3. 遺構の略称は下記のとおりである。

SI：竪穴住居跡 SD：溝 SK：土坑 SX：墓
4. 本報告書における遺物の略称及び縮尺は下記のとおりである。

番号のみ：土器・土製品（縮尺：1/4） S：石器・石製品（縮尺：2/3等） B：玉類（縮尺1/1） F：鉄器（縮尺1/2） C：錢貨（縮尺1/2）
5. 遺物実測図中のトーンは、土器の場合赤色塗彩を表す。
6. 本文中、挿図及び写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制	6
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 坂長下門前遺跡2・3区の調査	11
第1節 2区の調査	11
1. 概要	11
2. 遺構	13
第2節 3区の調査	16
1. 概要	16
2. 遺構	19
第3節 坂長35号墳の調査	25
1. 概要	25
2. 遺構と遺物	25
第4章 坂長ヨコロ遺跡の調査	32
第1節 立地と基本層序	32
第2節 1区の調査	34
1. 概要	34
2. 遺構と遺物	34
第3節 2区の調査	36
1. 概要	36
2. 遺構	37
3. 遺構外出土遺物	39
第5章 坂長熊谷遺跡の調査	45
第1節 1区の調査	45
1. 概要	45
2. 遺構	46
第2節 2区の調査	48
1. 概要	48
2. 遺構	49
3. 遺構外出土遺物	50
第6章まとめ	52

挿図目次

第1章 調査の経緯と経過

第1図 調査地位置図 1

第2章 位置と環境

第2図 遺跡位置図 7

第3図 周辺遺跡分布図 9

第3章 坂長下門前遺跡2区・3区の調査

第4図 2区グリッド図 11

第5図 2区基本層序 11

第6図 2区遺構分布図 12

第7図 遺構外出土遺物 13

第8図 SK1～SK5 14

第9図 SK6～SK10 15

第10図 3区グリッド図 16

第11図 3区基本層序 16

第12図 3区遺構分布図 17

第13図 SK1～SK5および出土遺物 18

第14図 SK6～SK8および出土遺物 20

第15図 SD1 21

第16図 土塁および出土遺物 22

第17図 SD2および出土遺物 23

第18図 遺構外出土遺物（1） 24

第19図 遺構外出土遺物（2） 24

第20図 坂長35号墳 26

第21図 坂長35号墳断面図 27

第22図 坂長35号墳埋葬施設 29

第23図 坂長35号墳出土土器 30

第24図 坂長35号墳出土玉類 31

第4章 坂長3コロ遺跡の調査

第25図 1区土層断面図 32

第26図 坂長ヨコロ遺跡遺構分布図 33

第27図 2区土層断面図 34

第28図 SK1 34

第29図 SK2 35

第30図 SK3 35

第31図 SK4 35

第32図 SK4出土遺物 35

第33図 SX1 36

第34図 SX1出土土器 36

第35図 SI1 37

第36図 SI1出土遺物 38

第37図 SX2 39

第38図 SX2出土土器 39

第39図 遺構外出土遺物（1） 40

第40図 遺構外出土遺物（2） 41

第41図 遺構外出土遺物（3） 43

第42図 遺構外出土遺物（4） 44

第43図 遺構外出土遺物（5） 44

第5章 坂長熊谷遺跡の調査

第44図 調査区上層断面図 45

第45図 遺構分布図 46

第46図 SK1 46

第47図 遺構外出土遺物 47

第48図 調査区上層断面図 48

第49図 遺構分布図 49

第50図 SK1 50

第51図 SD1・2 50

第52図 石列1・2 50

第53図 遺構外出土遺物 51

挿表目次

第3章 坂長下門前遺跡2区・3区の調査

第1表 2区落とし穴一覧表 13

第2表 3区落とし穴一覧表 19

第3表 3区墓壙一覧表 20

図版目次

カラー図版

- 1—1 坂長35号墳出土土器
1—2 坂長35号墳出土玉類
1—3 坂長35号墳棺痕跡（北から）
2—1 坂長ヨコロ遺跡SX1出土備前焼壺
2—2 坂長ヨコロ遺跡出土陶磁器
- 図版**
- 坂長下門前遺跡2区**
- 3—1 調査地周辺の地形（南東から）
3—2 調査地周辺の地形（上が北）
4—1 SK1完掘状況（西から）
4—2 SK2完掘状況（南から）
4—3 SK3完掘状況（東から）
4—4 SK4完掘状況（南から）
4—5 SK5完掘状況（西から）
4—6 SK8完掘状況（東から）
4—7 SK7完掘状況（北から）
4—8 SK9完掘状況（東から）
5—1 SK10土層断面（北から）
5—2 SK3底面杭痕跡検出状況（南から）
5—3 調査区完掘状況（西から）

坂長下門前遺跡3区

- 6—1 調査地周辺の地形（南東から）
6—2 調査地周辺の地形（北西から）
7—1 調査地全景（北東から）
7—2 調査地全景（上が北）
8—1 SK1完掘状況（南から）
8—2 SK2完掘状況（東から）
8—3 SK6～SK8検出状況（北から）
8—4 SK6土器出土状況（東から）
8—5 SK7土層断面（北東から）
8—6 SK7完掘状況（北から）
9—1 土壙全景（西から）
9—2 SD2完掘状況（東から）
9—3 土壙土層断面（東から）
10—1 SK6出土土器

- 10—2 3区出土土器（1）
10—3 3区出土土器（2）
10—4 3区出土石器
10—5 土壙出土古銭

坂長35号墳

- 11—1 坂長35号墳全景（上が北）
11—2 坂長35号墳（東から）
12—1 棺痕跡検出状況（北から）
12—2 棺痕跡完掘状況（北から）
12—3 棺痕跡土層断面（北から）
13—1 墓擴完掘状況（北から）
13—2 墳丘除去後の状況（東から）
13—3 墳頂土器出土状況（東から）
14—1 周溝土器出土状況（1）（南から）
14—2 周溝土器出土状況（2）（南から）
14—3 周溝土器出土状況（3）（北から）
15—1 周溝土器出土状況（4）（南から）
15—2 周溝玉類出土状況（東から）
15—3 周溝土層断面（西から）
16 出出土器

坂長ヨコロ遺跡

- 17—1 調査地周辺の地形（西から）
17—2 調査地周辺の地形（北西から）
18—1 1区調査終了状況（南東から）
18—2 2区調査終了状況（東から）
19—1 SK1完掘状況（東から）
19—2 SK2完掘状況（北から）
19—3 SX1検出状況（東から）
19—4 SX1完掘状況（南東から）
20—1 SX2墓擴検出状況（北東から）
20—2 SX2土層断面（北から）
20—3 SX2完掘状況（北から）
21—1 SI1床面検出状況（北から）
21—2 SI1土層断面（南東から）
21—3 SI1床面土器出土状況（北から）
21—4 SI1完掘状況（北から）

- | | | | |
|--------|---------------|------|----------------|
| 22—1 | SII出土土器 | 27—1 | 1区SK1完掘状況（南から） |
| 22—2 | SX2出土土器 | 27—2 | SD1完掘状況（南東から） |
| 22—3 | 遺構外出土土器（1） | 27—3 | SD2完掘状況（西から） |
| 23 | 遺構外出土土器（2） | 28—1 | 2区SK1完掘状況（南から） |
| 24—1 | 出土石器・石製品 | 28—2 | 石列1（東から） |
| 24—2 | 出土鉄製品およびX線画像 | 28—3 | 石列2（西から） |
| 坂長熊谷遺跡 | | | |
| 25—1 | 1区調査前の状況（北から） | 29—1 | 1区出土土器 |
| 25—2 | 1区調査終了状況（西から） | 29—2 | 2区出土土器 |
| 26—1 | 2区調査前の状況（北から） | 30—1 | 1区出土青磁 |
| 26—2 | 2区調査終了状況（西から） | 30—2 | 1区出土石鍋 |
| | | 30—3 | 鉄器およびX線画像 |

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

坂長下門前遺跡・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡は、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴って発掘調査を実施した遺跡である。これらの遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町地内の道路予定線上に位置し、坂長下門前遺跡に含まれる坂長35号墳を除いては、いずれも「周知の埋蔵文化財包蔵地」ではなかったが、地形などから集落跡等が存在することが推定された。そこで、道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国（文化庁）及び県の補助金を受けて平成17年度（坂長下門前遺跡）及び19年度（坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡）に、試掘調査を実施した。その結果、坂長下門前遺跡からは土器が出土し、古墳時代の集落跡が存在する可能性が想定された。坂長ヨコロ遺跡からは落とし穴などが出土し、縄文時代の遺跡が存在すると考えられた。坂長熊谷遺跡では、古墳状の地形が認められた。この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は、文化財保護法94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所長は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条の規定に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。



第1図 調査地位置図

第2節 調査の経過

平成20年度の発掘調査は、工事日程等の関係で、3遺跡6調査地を4期に分けて調査した。以下、調査を実施した順に経過を記載する。

坂長下門前遺跡2区

調査地は、高塚山と越敷山を主峰とする丘陵地帯から派生する尾根上に位置する。1辺約40~68mの四辺形の調査区を設定した。標高は最も高い所で84.5m、低い所で76.0mを測る。

3月18日に調査前航空撮影と航空写真による調査前地形測量を行った。4級基準杭と公共座標第V系に基づく10m間隔の方眼杭の打設は測量業者に委託し、打設は4月中旬に発掘調査と並行して行った。方眼軸には、北から南にアルファベットを、西から東に数字を付し、方眼の呼称は、例えばA3というように北東角の杭で代表する。方眼についての原則は、他の遺跡でも同様である。

3月24日から3月27日まで、重機による表土剥ぎを実施した。遺物が全く出土しなかったため、表土剥ぎは現地表下約40cmの漸移層上面で止めた。

発掘作業員の稼動は4月8日に開始した。遺構検出はローム層上面で行い、遺構の掘削は4月21日から着手した。多くの木の根痕や風倒木痕に混じり、落とし穴10基を検出した。遺構の調査は5月27日に終了した。

谷を挟んで東隣の坂長下門前遺跡1区の調査で旧石器の可能性がある石器が出土したため、遺構の調査と並行して、ローム層の調査を5月7日から5月28日まで行った。遺物は出土しなかった。

5月28日にすべての掘削作業を、5月29日にすべての調査を終了した。

○坂長下門前遺跡2区の調査経過

3月18日 調査前航空撮影

3月24日~3月27日 重機による表土剥ぎ

4月8日 発掘作業員稼働開始

4月17日 方眼測量

4月21日 遺構調査開始

5月7日 ローム層掘削開始

5月15日 調査後地形測量終了

5月27日 遺構調査終了

5月28日 掘削作業終了

5月29日 調査終了

坂長ヨコロ遺跡

調査地は、1区（東西51m南北27m）が急峻な尾根上に位置し標高71.5m~84.0mを測り、2区（東西72m南北28m）が部分的にテラス状の平坦面が介在する急斜面の丘陵裾部にあり標高58.0m~71.0mを測る。1区と2区は約20m離れている。

測量業者に委託して、調査前地形測量のデータ採取を兼ねた調査前航空撮影を6月12日に実施し

た。4級基準杭と公共座標第V系に基づく10m間隔の方眼杭は、表土剥ぎ後の6月中に打設した。

重機による表土剥ぎは、6月17日から6月26日まで実施し、現地表下約20cm~50cmの黒色土上面で止めた。この間の6月23日には、1区の地表面直下から備前焼の壺が出土した。2区西側の急斜面部分の表土剥ぎについては発掘作業員稼働後に人力で行ったが、予想以上に表土が厚かったため、7月24日と25日の両日に、再度重機を用いて行った。

発掘作業員の稼動は7月1日に開始した。まず、1区の備前焼が出土した周辺から包含層の調査に着手した。遺構掘削は7月9日に始め、7月16日までに4基の落とし穴などを調査した。調査後地形測量を行って、7月22日に1区の調査を終えた。

7月4日から1区と同時進行で2区の調査に入った。7月28日から遺構掘削に入り、古墳時代の堅穴住居跡1棟と中世墓1基などを調査した。遺構調査は8月20日に終わり、同日にすべての調査を終了した。この間、8月6日には、伯耆町の小学生ほか35名（ふるさと探検隊）の見学があった。

○坂長ヨコロ遺跡の調査経過

6月12日 調査前航空撮影

6月17日~6月26日 重機による表土剥ぎ。23日に備前焼壺出土

7月1日 発掘作業員稼働開始。1区調査開始

7月4日 2区調査開始

7月9日 1区遺構調査開始

7月22日 1区調査終了

7月24・25日 2区西側斜面部の重機による表土剥ぎ

7月28日 2区遺構調査開始

8月4日 堅穴住居跡SI1掘削開始

8月6日 伯耆町小学生等35名見学

8月20日 調査終了

坂長下門前遺跡3区

調査地は、坂長下門前遺跡2区から谷を隔てた東側の尾根上に位置する。1辺約70mのほぼ菱形の調査区を設定した。標高は最も高い所で90.0m、低い所で81.5mを測る。

7月26日に、測量業者に委託して、調査前地形測量を兼ねて調査前航空撮影を行った。

重機による表土剥ぎは7月29日から8月9日まで実施した。現地表下約30cmの黒色土上面を目安とした。調査区の南西部分約900m²には、坂長35号墳と尾根を横断する土塁が含まれていたため、重機は用いずに、作業員稼働後に人力による表土剥ぎを行った。

測量業者に委託し、4級基準杭と公共座標第V系に基づく10m間隔の方眼杭を8月5日までに打設した。

発掘作業員の稼動は8月18日に開始した。まず、9月2日にかけて表土の手剥ぎを行い、同時に8月22日からは包含層の掘削作業に入った。遺構の検出はローム層上面で行い、遺構の掘削は9月5日から着手した。3基の墓壙と5基の落とし穴などを確認し、遺構の調査が終了したのは10月27日であった。

坂長35号墳は高さが約1mで、伯耆町による試掘でも黒色土が確認されるのみであったため、調査開始時点では古墳でない可能性が高かった。そこで、8月27日には坂長35号墳の墳裾からトレント調査を開始した。周溝や埋葬施設は不明瞭で、9月9日に至ってようやくトレント断面に棺痕跡らしき上層を認め、古墳であることを確認した。棺内と推定された部分の土は、岸本調査事務所に持ち帰り水洗選別を実施したが、無遺物であった。最終的には35号墳の墳丘をすべて除去し、他に埋葬施設が設けられていないか調べたが、認められなかった。

10月20日に35号墳と土塁の状況を記録するため航空撮影を行った。撮影後、墳丘の掘り下げと土塁の除去を行った。土塁の除去は、下層に遺構が存在する可能性がある丘陵中央部に限った。また、石英製石核が出土したため、10月29日にかけてローム層の調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

10月31日に掘削作業を、11月4日にすべての調査を終了した。

○坂長下門前遺跡3区の調査経過

- 7月26日 調査前航空撮影（調査前地形測量用を兼ねる）
- 7月29日～8月1日 重機による表土剥ぎ
- 8月5日 方眼測量終了
- 8月18日 発掘作業員稼働開始
- 8月18日～9月2日 坂長35号墳および土塁の人力による表土剥ぎ
- 8月27日 坂長35号墳調査開始
- 9月4日 上塁調査開始
- 9月5日 遺構調査開始
- 10月20日 35号墳および土塁航空撮影、土塁除去およびローム層掘削開始
- 10月27日 35号墳墳丘除去開始
- 10月31日 掘削作業終了
- 11月4日 調査後地形測量終了。調査終了

坂長熊谷遺跡

調査地は、1区が丘陵裾部の標高62.0m～83.0mの急斜面部に位置し、東西約55m南北約45mの範囲を占める。2区には古墳状の高まりが乗る丘陵裾部の張り出しと浅い谷頭とが含まれ、標高は64.0m～69.0mを測る。東西約70m南北約15mの細長い調査区である。2つの調査区は約70mを隔てる。

調査に先立って9月2日に測量業者に委託して調査前航空写真撮影と調査前地形測量を行った。

9月8日から11日に重機による表土剥ぎを実施した。2区中程の古墳状地形部は人力で表土剥ぎをするために除外した。また、1区の北西部分は、厚い造成土で覆われていることが調査中に判明したため、11月13日に重機による表土剥ぎを再度行った。

9月22日から24日には業者委託により4級基準点と公共座標第V系に基づく10m間隔の方眼杭を設置した。

発掘作業員の稼動は、11月5日に開始し、調査は1区と2区を並行して実施した。

1区の西側谷部は、上方からの崩落土が1m以上堆積し無遺物であるため、この部分の調査は表土を除去するのみで終えた。また、南西部には水源地工事の際の堆土が厚く堆積しており、まず遣構と

遺物の有無を確認するためにトレーナーを設定した。その結果、工事の際に削平されていることが明らかで遺物も出土しなかったので、この部分の調査を終了することとした。検出した遺構は土坑1基で、全ての調査は12月1日に終了した。

2区は11月6日から人力による古墳状の高まりの表土剥ぎに着手した。遺構も遺物も出土しなかつたため、最終的には古墳ではないと判断した。検出した遺構は落とし穴1基と石列2基などで、調査は12月3日に終了した。

○坂長熊谷遺跡の調査経過

9月2日 調査前航空撮影

9月8日～9月11日 重機による表土剥ぎ

9月22日～9月24日 方眼杭打設

11月5日 作業員稼働開始。1区調査開始

11月6日 2区調査開始

11月13・14日 重機による1区造成土掘削

11月14日 遺構調査開始

12月1日 1区調査終了

12月3日 2区調査終了



第3節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	有田 博充
事 務 局 長	中村 金一
事 務 職 員	岡田美津子（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長	久保龍二朗（本務 県埋蔵文化財センター所長）
次 長	石本 富正
文 化 財 主 事	大川 泰広（鳥取県教育委員会 派遣）
事 務 職 員	岡田美津子 福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長	國田 俊雄
文 化 財 主 事	高橋 浩樹（財団法人米子市教育文化事業団 派遣） 高橋 章司（鳥取県教育委員会 派遣） 坂本 雄和（鳥取県教育委員会 派遣）

○調査協力

財団法人米子市教育文化事業団 西部土地改良区 伯耆町教育委員会
(五十音順、敬称略)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

坂長下門前遺跡・坂長ヨコロ遺跡・坂長熊谷遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に所在する。周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、今回調査した遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山碎屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

調査対象の3遺跡は、いずれも越敷山からのびる丘陵の末端に立地する。丘陵の北には、東西方向に谷が走る。この谷は湧水が豊富で、坂長ヨコロ遺跡の西方と坂長熊谷遺跡の南方には現在も水源地が存在する。谷の北側には長者原台地が広がり、多くの遺跡が分布する。

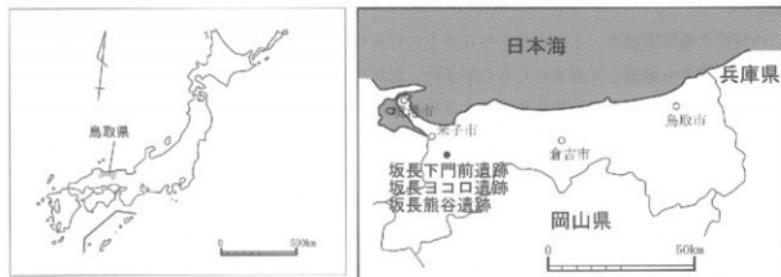
第2節 歴史的環境

旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。2点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刀を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡（50）からも、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとめて出土した例はまだない。

縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。



第2図 遺跡位置図

他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サスカイト製有茎尖頭器が見つかっている。

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（8）や陰田第9遺跡（9）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つかっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（8）や長砂第2遺跡（4）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に堅穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点的集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山1号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獸鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳（35）、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳（19）がある。墳丘規模20m前後の比較的小さな古墳が多い。

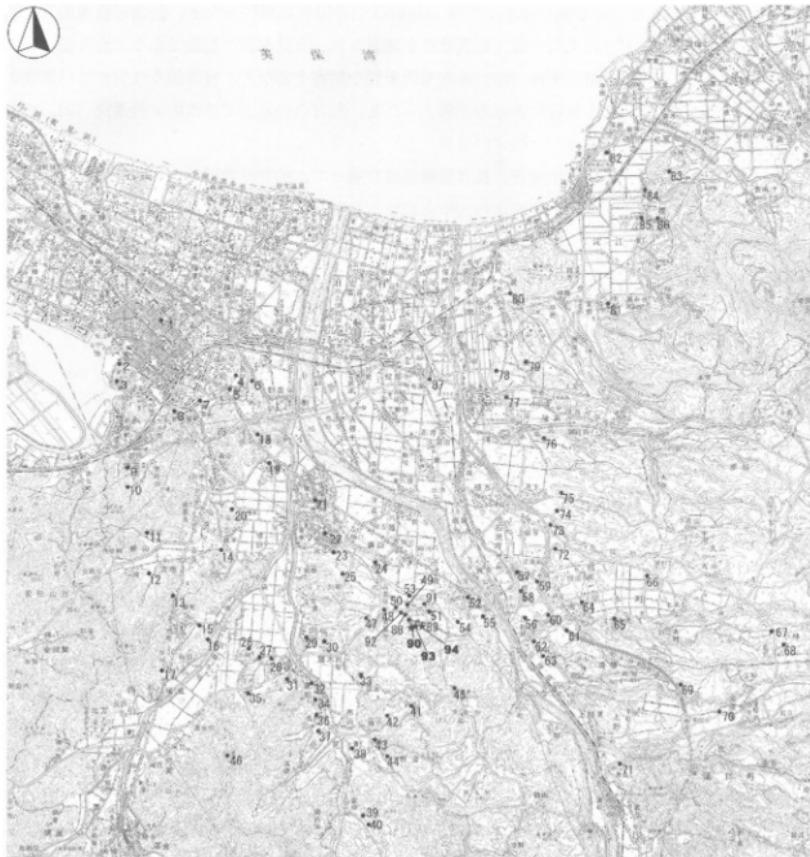
中期古墳としては、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。他には画文帶神獸鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定1号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像5号墳（18）の横口式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（9）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。坂長第8遺跡（89）では中期中葉の堅穴住居跡が3棟発掘されていて、付近に比較的規模の大きな集落跡が存在する可能性がある。

古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段合利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鷲尾は全国に他に1例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。長者原台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。



1 鎌町第1遺跡	17 清水谷遺跡	33 田住古墳群	49 板艮下星板遺跡	65 香原遺跡群	81 手井戸遺跡
2 久米第1遺跡	18 東宗像古墳群	34 宮前遺跡	50 板艮村上遺跡	66 須村遺跡	82 今津岸の上遺跡
3 矢子城	19 日原古墳群	35 普段寺1号墳	51 板中麻寺	67 真野ブリ遺跡	83 葛木乾田遺跡
4 長砂第1・2遺跡	20 小奈良遺跡	36 浅井11号墳	52 大寺麻寺	68 藍野遺跡	84 墓三遺跡
5 長砂第3遺跡	21 福市遺跡	37 浅井土居敷遺跡	53 長者原古墳群	69 林ノ原遺跡	85 向山古墳群
6 水道山古墳	22 青木遺跡	38 天王原遺跡	54 板中第3遺跡	70 下山南遺跡	86 上淀魔寺跡
7 池ノ内電塔	23 稲ノ第4遺跡	39 金田瓦窯	55 岸木大成遺跡	71 長山鳥籠遺跡	87 今在家下井ノ原遺跡
8 日久美遺跡	24 駒形西山ノ後遺跡	40 間部太郎窟	56 岸木古墳群	72 石州府古墳群	88 板長第7遺跡
9 旗田遺跡群	25 別所新田遺跡	41 萩名遺跡群	57 岸木瀧池	73 上福万遺跡	89 板長第8遺跡
10 奥旗田遺跡群	26 三崎般山古墳	42 田住松尾平遺跡	58 岸木苦野跡	74 日下寺山遺跡	90 板艮下門前遺跡
11 斯山遺跡群	27 大糸土器前遺跡	43 新金古墳群	59 岸木下の原遺跡	75 日下古墳群	91 大殿須谷遺跡
12 古市遺跡群	28 宮尾遺跡	44 鉢金小千谷遺跡	60 久古第3遺跡	76 尾高桜山遺跡	92 板長第6遺跡
13 谷吉遺跡群	29 諸木遺跡	45 須歌山遺跡群	61 具田崩遺跡	77 尾高城	93 板長ヨコロ遺跡
14 滝本遺跡群	30 後塔山古墳	46 手間要古跡	62 口別所古墳群	78 尾高斜壁山遺跡	94 板長熊谷遺跡
15 福成石堆前遺跡	31 大万遺跡	47 萬神上遺跡	63 吉定上号墳	79 亂中峰・前田遺跡	
16 福成草田遺跡	32 宮前3号墳	48 長者屋敷遺跡	64 久古北田山遺跡	80 小波原城遺跡	

第3図 周辺遺跡分布図

『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）や坂長第6遺跡（92）などでは大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設である可能性が高い。坂長村上遺跡（50）や坂長第7遺跡（88）からも円面鏡や刻畫土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では西山ノ後遺跡（24）で和同開跡と墨などを納めた胞衣壺が、桶ノ口遺跡（23）で石帶が出土している。

古代山陰道は、大寺庵寺、坂中磨寺、長者屋敷遺跡を通って、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諒訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。坂長第6遺跡では、多くの鉄滓や羽口などが出土し、郡衙に伴う官営製鉄工房として注目される。坂長村上遺跡や長者原18号墳（91）周溝上層などから多くの鉄闇遺物が出土しており、この地方での製鉄の開始が、文献に記された年代よりも大きく遡ることは確実である。

中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡莊に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山權現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承が残る。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永祿8年（1565）に、杉原盛重に焼き討ちされた。坂中地区の且那寺である普門寺は、元はこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長4年（1599）に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年（1617）に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年（1869）まで荒尾氏による自分子政が行われた。

坂長村は、明治11年（1878）に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年（1618）から数回の中斷を経ながら約250年にわたり、文久元年（1861）にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

【参考文献】

- 地質調査所 1962『5萬分の1地質図幅説明書 米子』(岡山第一18号)
- 山名巖 1964『山陰地方における第四紀末の諸問題』[鳥取県立科学博物館研究報告]
- 岸本町 1983『岸本町誌』
- 会見町 1996『会見町誌 統編』
- 米子市 2003『新修 米子市史』

第3章 坂長下門前遺跡2・3区の調査

第1節 2区の調査

1. 概要

坂長下門前遺跡2区は西伯郡伯耆町の西部、坂長地区に所在する。調査地は、越敷山からのびる丘陵の末端に近い尾根に位置し、標高は76.0m~84.5mを測る。尾根上の比較的平坦な部分の幅は約25mにすぎず、北東方向に向かって緩やかに傾斜する。調査地の東側と西側は急斜面地で、調査地の約半分を占める。調査前の状況は山林で、人為的な地形の改変や耕作の痕跡は全く認められなかった。平成18年度の発掘調査で14基の土坑が検出された坂長下門前遺跡1区は幅約90mの谷を隔てて西側に、後述する3区は幅約70mの谷を隔てて東側に位置する。

調査地の基本的な層序は、次の通りである（第5図）。1区と3区の基本層序とはほぼ同じである。

I層：表土。層厚約20cm。腐植土。

II層：褐色土。層厚約20cm。

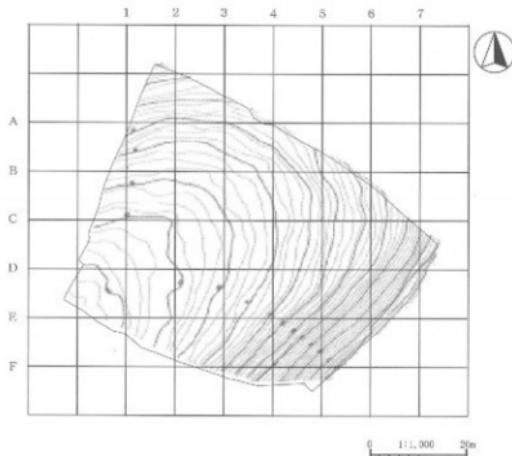
III層：黒色土。層厚約15cm。

IV層：灰褐色土。やや粘質。層厚約20cm。無遺物。漸移層。

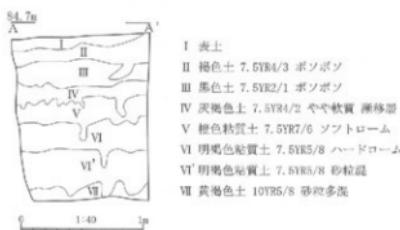
V層：橙色粘質土。層厚約20cm。ソフトローム。風倒木痕や木の根跡が多く見られる。

VI層：明褐色粘質土。層厚約30cm。ハードローム。

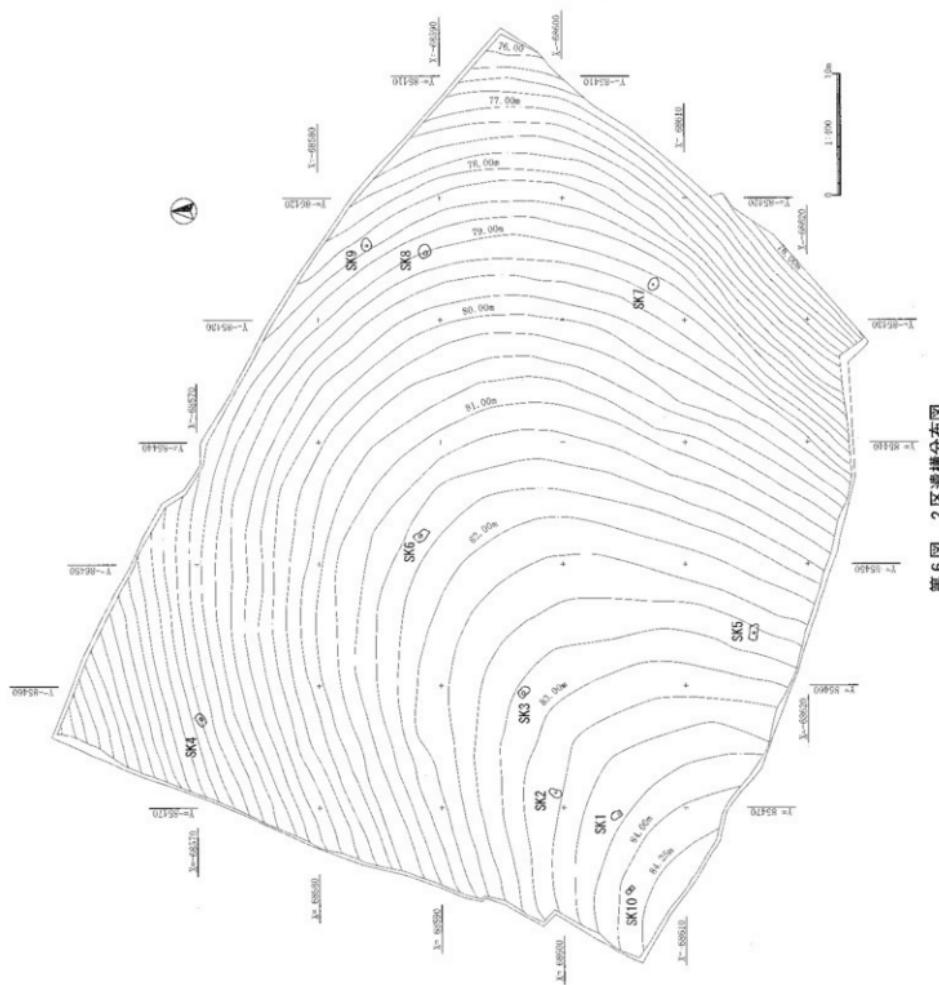
坂長下門前遺跡2区から検出した遺構は土坑10基で、いずれも落とし穴である。出土遺物は土器片2点のみで、遺構・遺物ともに非常に希薄であった。



第4図 2区グリッド図



第5図 2区基本層序



第6図 2区漁構分布図

2. 遺構

落とし穴 SK1～SK10 (第8・9図 図版4・5)

検出した土坑10基は、形態から落とし穴と考えられる。

第1表に一覧を掲げる。底面の平面形から、円形のもの (SK7・8・9) と、長方形あるいは長楕円形のもの (それ以外) の2種類に分類される。深さについても、前者は140cm程度、後者は多くが100cm程度を測り、概ね2分である。また、位置についても、円形のものは東あるいは南斜面上に設けられ、長方形のものはほとんどが尾根上に掘られている。以上から、両者はそれぞれ群をなすもので、おそらく異なる時期につくられたものと考えられる。

底面ピットは、すべての土坑で1つだけ設けられている。SK3・6・8・10の4基については、底面で杭痕跡を検出でき、3本または4本の細い杭が立てられていたことが分かった (図版5)。全体に小型であるSK10以外は、いずれも底面ピットの径は約30cm程度を測る。同様の底面ピットをもつSK4では、複数の杭が立てられていた可能性が高い。他の5基の底面ピットは径15cm程度の小さなもので、おそらく杭の本数は1本であったであろう。したがって、同時期に設けられた落とし穴でも、内部の構造は多様であったと考えられる。なお、西隣の丘陵上に位置する坂長下門前遺跡1区の12基の落とし穴は、底面の平面形が円形または楕円形で底面ピットをもたないものが多い点で、東隣の3区の落とし穴5基は長楕円形で底面ピットが浅い点で、それぞれに形態が異なっており、別々の時期に掘られたと思われる。そのなかでも、2区の長方形の一群は個性の強いものである。

遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、周辺地域での調査例から、縄文時代に属する可能性が高いと考えられる。

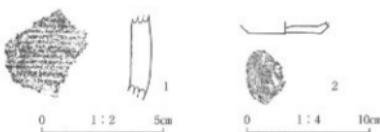
第1表 2区落とし穴一覧表

	標準 (m)		底面 (cm)		深さ (cm)	底面ピット (cm)	底面 径 深さ	位 置	備 考
	形態	長軸	短軸	形態	長軸	短軸			
SK1	長方形	93	59	長方形	83	42	104	1	18×13 尾根上
SK2	長円形	106	66	長椭円形	92	48	132	1	19×14 尾根上
SK3	長楕円形	100	65	長方形	79	34	103	1	30×25 尾根上
SK4	長方形	101	69	長方形	87	58	97	1	32×23 丘陵古跡
SK5	長方形	133	62	長方形	75	28	120	1	18×15 丘陵古跡
SK6	長方形	120	71	長方形	93	44	113	1	32×20 尾根上
SK7	楕円形	106	82	楕円形	71	47	148	1	14×12 丘陵古跡
SK8	円形	115	103	楕円形	74	50	146	1	34×27 丘陵古跡
SK9	楕円形	106	82	楕円形	53	35	138	1	17×16 丘陵古跡
SK10	長方形	74	35	長方形	58	26	90	1	21×16 尾根上

3. 出土遺物 (第7図)

2区から出土した遺物は土器片2点のみである。

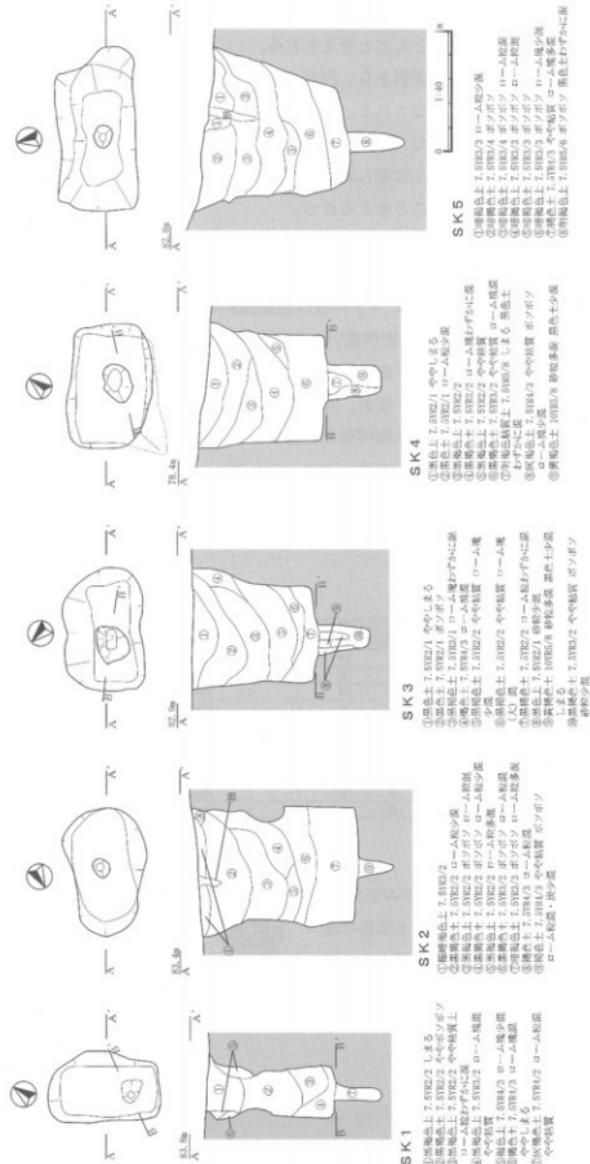
1は東斜面の木の根痕から出土した土師器の細片で、表面にハケメをもつ。古墳時代頃のものであろう。2は東斜面から表面採集した土師皿の底部片で中世のものである。



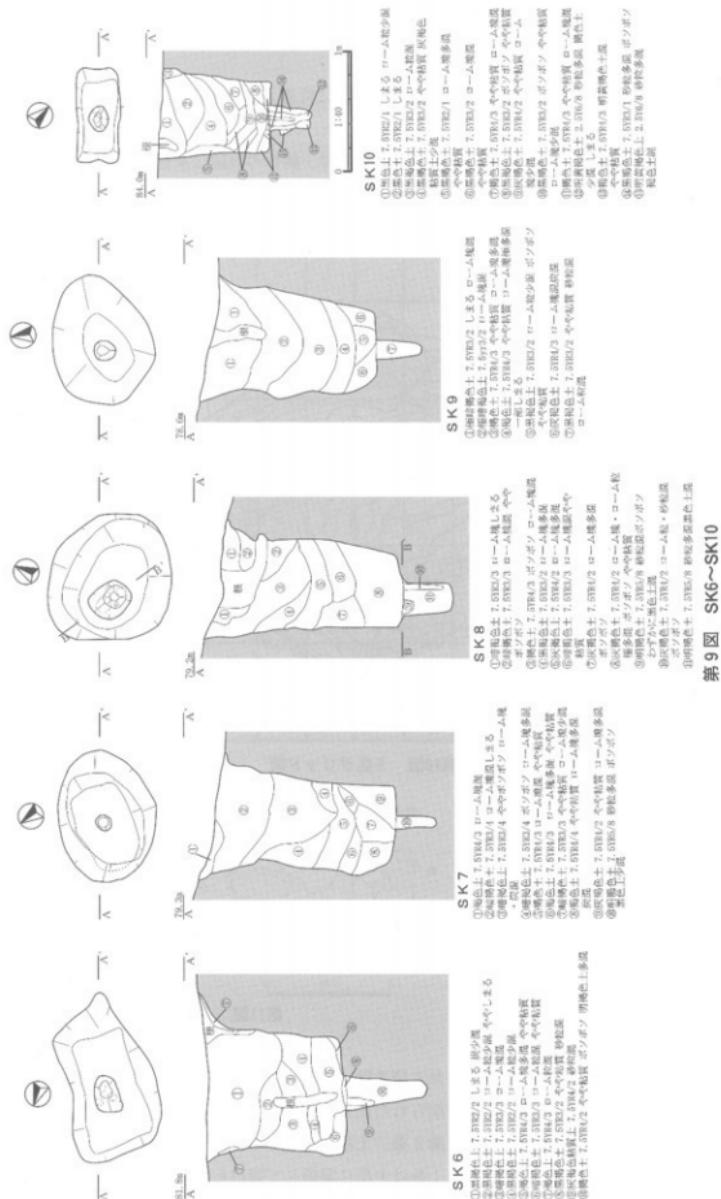
第7図 遺構外出土遺物

第7図 遺物観察表

遺物 番号	地 理 位 置	形 状 特 徴	口径 (cm)	高 さ (cm)	文様・調査	施 工 方 法	土 質	色 調	備 考	
									※復元値	△現存値
1 7	木の根痕 埋土	土師器	△3.6	△3.6	外縁: ハケメ 内縁: ケズリ	密 確かに野付を多く含む 良好	粘土質 良好	褐色 外縁: 褐い褐色 内縁: 暗褐色		
2 7	表面採集	土師器 皿	△0.7	△6.0	内外面: ナマ 底部: ニセナマ	面 内外面: 褐い瓦様色 良好	砂質 良好	褐色 内外面: 褐い瓦様色		



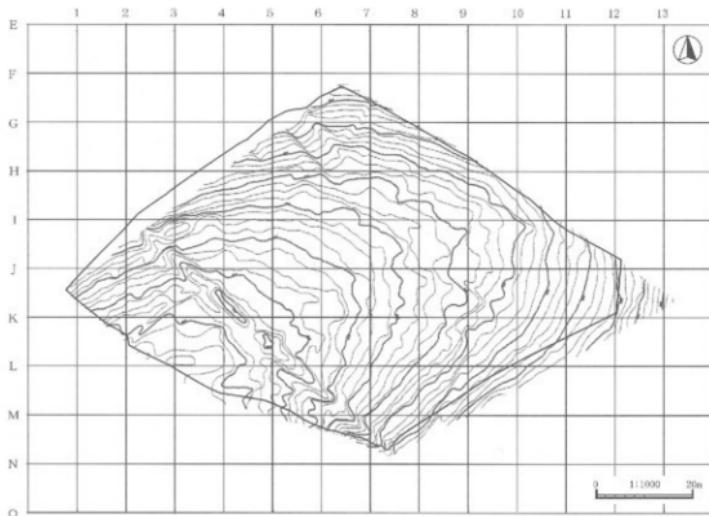
第8図 SK1~SK5



第2節 3区の調査

1. 概要

坂長下門前遺跡3区は、2区の東隣の丘陵先端近くに位置し、標高は81.5m～90.0mを測る。調査地の中央は幅40mほどの傾斜の緩い面で、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。南西側を除く三方は比較的急な斜面地である。調査前の状況は山林で、耕作の痕跡は東側の一部を除いて顕著ではなかった。調査区の南西6分の1の部分は、丘陵を横断して設けられた土壙によって区切られている。



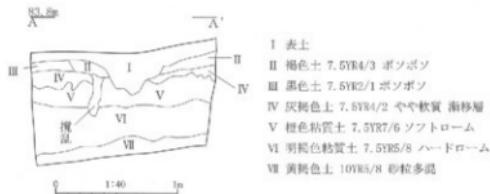
第10図 3区グリッド図

る。北東斜面の下には普門寺があり、正確な年代は不明ながら16世紀に創建されたといわれ、大寺地区にあった安国寺の奥の院と伝えられている。なお調査区の南西部に所在する坂長35号墳については、節を改めて報告する。

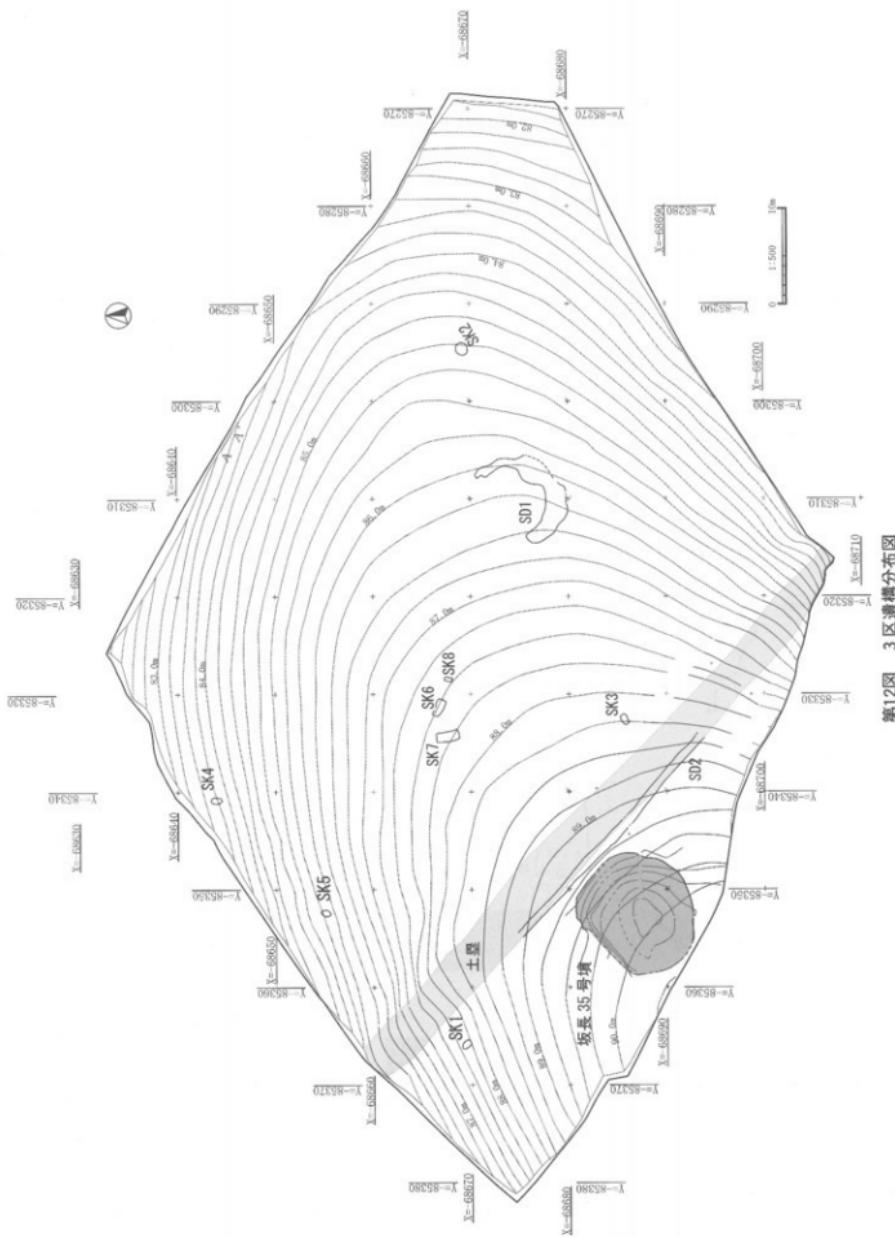
調査地の基本層序（第11図）は2

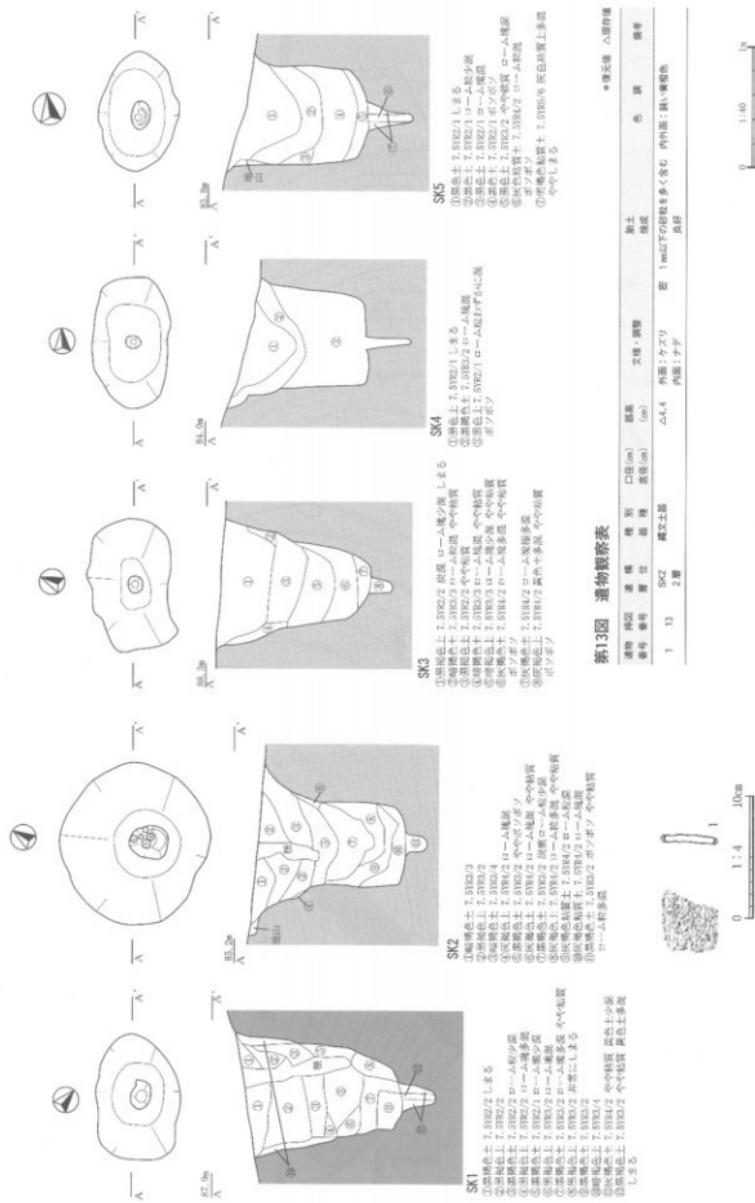
区とはほぼ同様であるが、II層（褐色土）およびIII層（黒色土）が、ともに約15cmにも満たず薄い。これは、坂長古墳群や土壙の築造のために削られた部分があったためと考えられる。

3区から検出した遺構は、土坑8基と溝2条、土壙1条である。土坑のうち5基は落とし穴、3基は古墳時代中期の墓塚である。溝のうち1条は土壙に関係して設けられたものと推定される。遺物はII層とIII層中から、縄文土器・弥生土器・石器などが出土している。



第11図 3区基本層序





第13図 遺物観察表

第13図 SK1～SK5および出土遺物

2. 遺構

落とし穴 SK1～SK5（第13図 図版8）

5基の落とし穴のうち、円形のSK2を除く4基は長楕円形で、大きさもよく似ている。特に、SK1・4・5の3基は、丘陵西斜面にほぼ一列に等間隔で設けられており、底面ピットの深さも類似するので、一群をなすものであろう。底面ピットの土層断面などから考えると、杭は1本であったであろう。

SK2は円形で大型である点で異質である。底面ピットは浅く、土層断面では確認できなかったが、ピット底面に残された痕跡から5本の細い杭が立てられていたと考えられる。埋土上層から、縄文土器の細片が出土した。1は粗製の深鉢の胴部で、外面を粗いケズリで仕上げる。後期から晩期のものであろう。したがって、SK2の年代は縄文晩期以前と推定される。

第2表 3区落とし穴一覧表

形態	地表面積(cm)		底面(cm)		深さ(cm)	数	底面ピット(cm)	底面形状	位置	備考
	長崎	長崎	形態	長崎						
長楕円形	103	70	楕円形	51	42	127	1	24×16	27	丘陵西斜面
円形	133	124	円形	56	55	120	1	32×28	18	丘陵東側面 縄文土器出土
長楕円形	109	68	長楕円形	41	24	122	1	14×12	18	尾根上
長楕円形	107	62	長楕円形	64	41	96	1	13×10	37	丘陵西斜面
長楕円形	90	65	長楕円形	71	46	102	1	23×16	37	丘陵西斜面

墓壙 SK6～SK8（第14図 図版8）

調査区の中央、尾根上の平坦面に3基の墓壙が集まっている。いずれの墓壙も、後世の土塁の築造のために上部を削平されており、底面近くの15cmほどが残っているにすぎない。

SK6は3基の中央に位置し、主軸は東南東に向く。底面は緩やかな二段掘りになっているが、北側に偏っていて、底面間の差はわずか9cmしかない。底面が平坦でなく小口の痕跡などは認められないで、木棺ではなく素掘りの土坑に埋葬したものと考えられる。5世紀第3四半期頃の土器の坏（第14図2）が破片となって出土した。伯耆町による試掘調査でも、同時期の低脚壺が出土している。

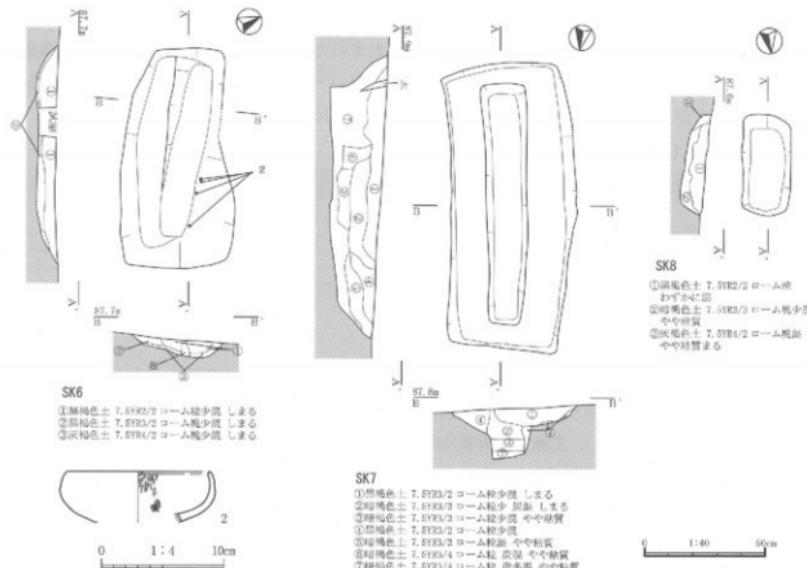
SK7は、SK6の西側に約1.7m離れて位置し、主軸をほぼ北に向ける。底面は二段掘りで、深さ22cmの土坑が中央にある。その幅は33cmで、SK6とほぼ同じである。小口痕はないが、中央坑の底面は平坦で埋土に炭化物が含まれるので、木棺墓の可能性がある。遺物は出土しなかった。

SK8はSK6の東方1.7m、SK7とは約5m離れて設けられ、主軸をほぼ北に向く。長方形の小さな土坑で、底面に中央坑はない。遺物は出土していない。

土坑の底面付近のみが残っていることからすると、本来はもっと多くの墓壙があったが、それらは削平により失われ、たまたま深めに掘られていた3基のみが残ったのかもしれない。埋葬施設と副葬品の貧弱なことが注意されるが、それは後述する坂長35号墳にも共通する特徴であり、坂長古墳群の特色と考えられよう。

第3表 3区墓壙一覧表

	横出面(㎝)	横 幅	底面(㎝)	底 幅	深さ (㎝)	中央坑(㎝)	幅	深さ (㎝)	主拠方位	備考
SK6	180	75	156	56	9	145	35	5	東南東61度	土壁基盤出土
SK7	233	103	225	89	15	198	33	22	北350度	酸化物土土
SK8	83	40	67	26	18	—	—	—	北16度	



第14図 遺物觀察表

遺物 番号	埋 置 場 所	遺 物 種 類	特 徴	口徑(㎝)	底 面 直 径(㎝)	器高 (㎝)	文様・形質	胎 焼 成	土 質	色 調	備 考
2 14	SK6 埋土2層	土器	片	11.0	△4.1	△4.1	外側: ミコナデ 内側: ミコナデ 底部ナデ	密 やや良好	内側: 黒色	内側: 黑色	

第14図 SK6～SK8および出土遺物

溝 SD1 (第15図)

調査区中央東寄りの尾根上に位置する。不整形の半円に巡る浅い溝で、幅0.7~1.8m、深さ0.1~0.2mを測る。北西側には統きが認められず、南東側は曖昧であるが、円形に復元すると内径7.0m外径11.0mになる。遺物は出土しなかった。

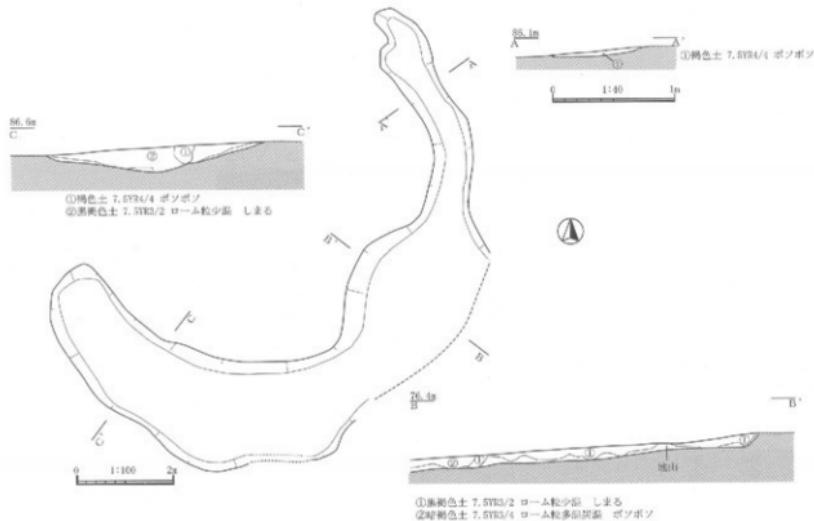
削平された古墳の周溝の可能性もあるが、不整形すぎる。時期・性格とも不明の溝としておく。

土塁と溝 SD2 (第16・17図 図版9)

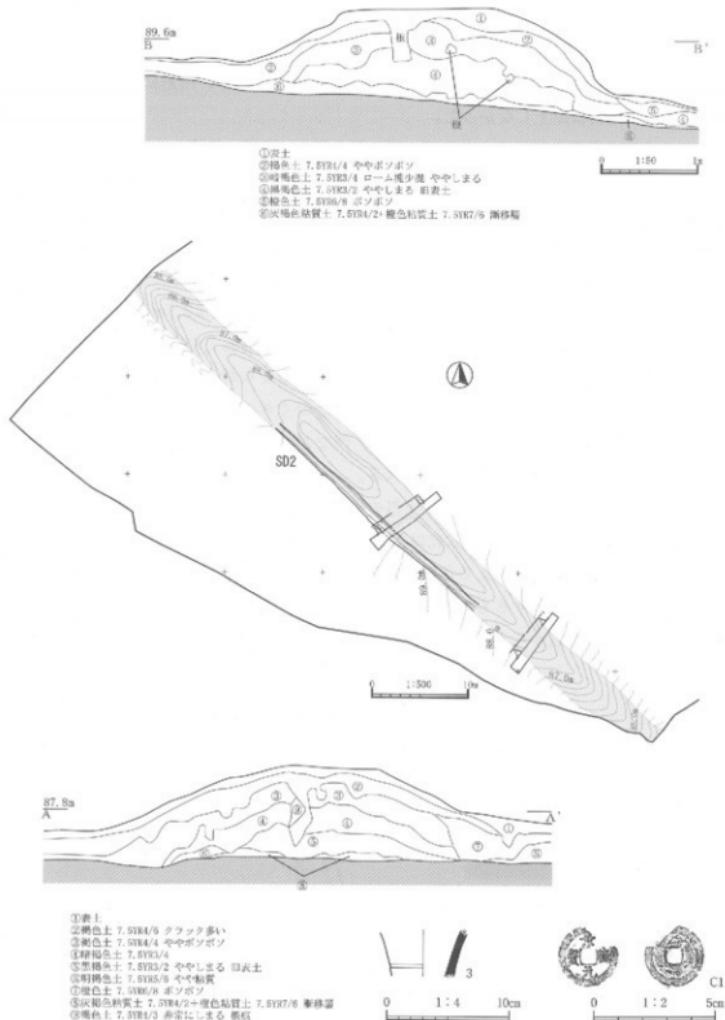
調査区南端からちょうど北に向かって走る土塁で、調査区内での長さは70mを測る。調査地のある丘陵を横断して設けられており、両端は調査区外の丘陵裾近くまで達している。現地表面からの高さ約0.6~0.8m、幅約3.8mを測る。土層断面の観察から、本来の幅は2.7m前後、高さは1.0~1.5m程度あったものと推定される。内部はⅡ層あるいはⅢ層相当の褐色土や黒色土を盛り上げて築かれているが、互層にしたり突き固めたりした様子はなく、やや縮まりがよい程度である。また、表面に粘土を貼るなどして固めた痕跡も見られない。比較的雑なつくりの土塁である。尾根の最高所では、土塁は約3mにわたって途切れている。調査の結果、門などの構造物の跡は検出されなかったので、山道を付けるために後世に切ったものと考えられる。

築造年代を推定できる手がかりとして、土塁の裾近くの内部から北宋錢の景德元宝が出上している(C1)。初鑄年は1004年であるが、公式には寛文10年(1670)の渡来銭使用禁止令まで流通したとされるので、17世紀までの年代を考える必要がある。他に土塁内部からは須恵器の壺頭部(3)が出土している。坂長古墳群に関係するものであろう。

土塁を除去すると、南辺から土塁に沿って溝SD2が現れた。除去範囲全体において、25mの長さで



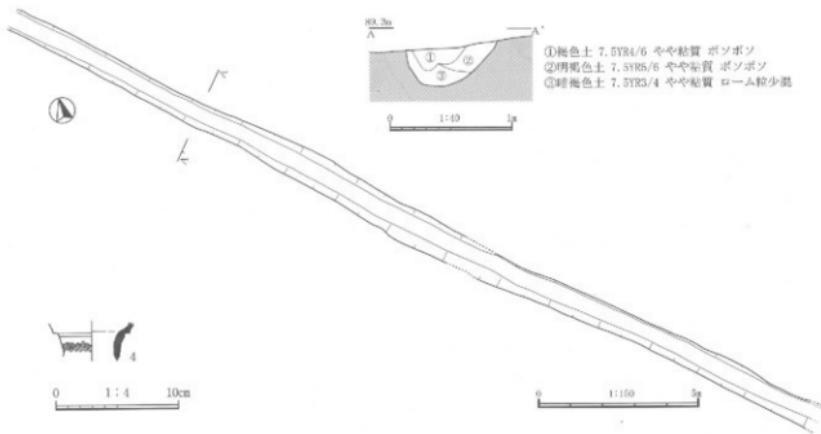
第15図 SD1



第16図 遺物観察表

遺物観察表								中復元箇数 △現存箇数			
種類	埋蔵層	種類	種別	口径(cm)	基底(cm)	文様・特徴	物	土成	色	絆	備考
番号	番号	層位	各	幅(cm)	厚さ(cm)		後	成	色	絆	備考
3	16	土器 黒色土	漆器 壺	△3.8	外面：鉛板ナメ 内面：鉛板ナメ			漆 良好	内外面：灰色		
遺物	件名	層位	器 名	外径(cm)	法 厚(cm)	量(g)	材 質				
C1	16	土器 黒色土	漆器元室	24.8	1.4	△2.2	鉛			1004年初調	

第16図 土器および出土遺物



第17図 遺物観察表

遺物番号	件名	遺 墓	種 別	口徑 (m)	基準 底径 (m)	文様・調整	解 説	土 成	色 調	備 考	△既存位
											△既存位
4 17	SD2	須恵器 埴土2層	壺	△2.6	△2.6	外輪：輪底ナデ 内面：目輪ナデ	波状文	直 良好	外輪：灰色 内面：薄い黄色		

第17図 SD2および出土遺物

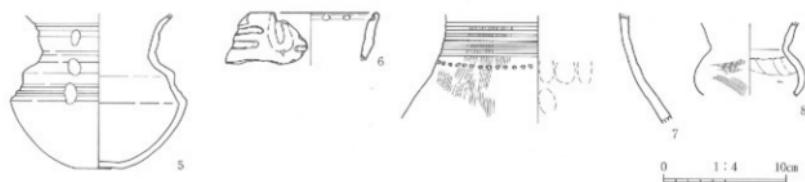
確認している。ローム層を掘り込んで設けられており、幅75cm、深さ30cmを測る。埋土の構成は、土塁内部と類似しているので、土塁の崩土であろう。防御用の空堀と考えるには、あまりに小規模なため、土塁の築造時に印押などに掘られたものと考えられる。須恵器の壺頸部片（第17図4）が出土しており、古墳群からの流れ込みと考えられる。

土塁の性格については、小規模なことや、周辺が自然地形で郭・堀切等が見られないことから、山城などの防御の目的は考えにくい。現在、土塁を境にして北側が普門寺、南側が複数の個人の所有地となっていることが注目される。また、土塁の築造方法も性格を考える上で参考になろう。南辺にのみ溝が設けられていることや、北側の遺構や包含層は削平されているのに対し、南側に隣接する坂長35号墳には手が付けられていないことを考えると、土塁北側の土地所有者が南側に対する境界線として設置した可能性が高い。普門寺の正確な創建年代は不明ながら、永禄5年（1562）に没した安国寺二世器工晟仁和尚の開山とされるので（『岸本町誌』）、北宋銭の流通年代も考慮すると、土塁は室町時代後期から江戸時代前期頃に寺域を示すものとして設けられたのではなかろうか。

3. 遺構外出土遺物（第18・19図 図版10）

第18図5は繩文土器の壺形土器で、注口土器であるかもしれない。底部は小さくわずかにくぼむ。肩部に2段の面を設け、下の段には2条の凹線を巡らす。口縁部にも2条の凹線を巡らす。肩部と口縁部には指頭によるくぼみが3段にわたって施され、1周を5区画に分ける。繩文後期後半の凹線文系土器に属するものであろう。6も同様の土器の口縁部片で、内部に凹線を巡らせて刺突を加える。

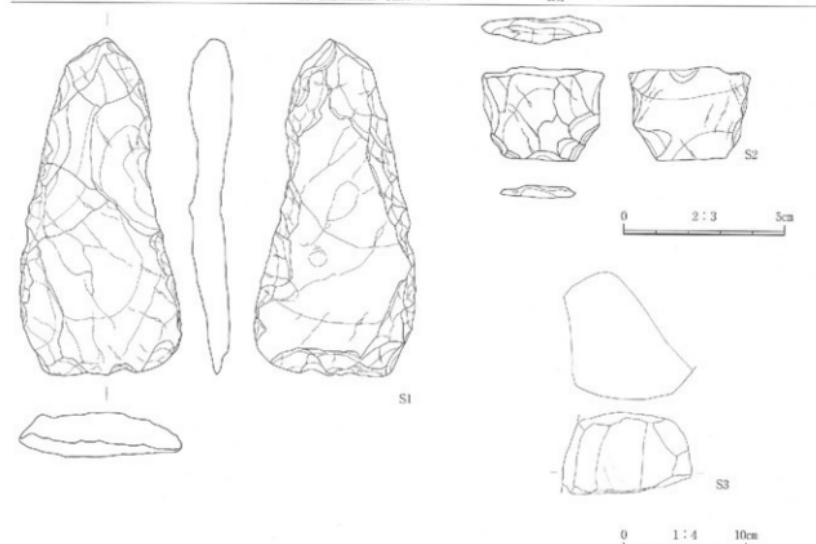
7は弥生土器の壺頸部で、中期後葉。8は土師器の小壺で、5世紀後半のもの。



第18図 遺構外出土遺物（1）

第18図 遺物觀察表

遺物番号	発見場所	種類	器種	口径(cm)	基底(cm)	文様・調節		胎土	色	層	考
						△	△				
5 18	KS 3層	岐文土器	直筒土器	4.0	△12.6	外面：下平ナテ 上平ミガキ 2条の凹線 内面：ナジ	青 良好		内外面：灰白色		
6 18	KS 3層	岐文土器			△3.9	外面：2条の凹線 指跡によろくばみ 内面：凹面 刻突	やや青 良好		内外面：黄褐色		
7 18	LS 3層	弥生土器	器		△8.5	外面：ハクメ 8条以上の凹線 列点 内面：凸面	青 胎土を多く含む 良好		内外面：緑色		
8 18	LS 2層	土器部 小器			△5.9	外面：腰帯以上はコナジ 以下ハケヌ 内面：圓錐形底江漬 倒伏ケシリ	青 1mm以上の段粒を多く含む 良好		内外面：緑色		



第18図 遺構外出土遺物（2）

第19図 遺物觀察表

遺物番号	標印番号	遺物種類	型式	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
S1	19	K10 2層	石鋸	10.4	4.8	1.1	85.3	凝灰岩	
S2	19	35号墳周溝 1層	両面調整石器	△2.8	△3.7	8.3	11.0	頁岩	
S3	19	K11 2層	磨石	△6.6	△10.2	10.4	786.0	花崗岩	
S4	19	H9 ソフトローム上層	石核	5.0	6.0	2.9	67.9	石英	
S5	19	L5 2層	砥石	△8.4	5.8	1.3	99.3	流紋岩	

第19図S1は凝灰岩製の石鋸で、剥片を素材にした小型のもの。S2は頁岩製両面調整石器の基部破片。尖頭器であろうか。坂長35号墳周溝からの出土。S3は磨石の破片で、花崗岩製。S4は石英製石核。水晶に近い良質の礫を半割し、分割面を作業面として求心的に鱗形の剥片を剥いたもの。節理で半分に折れた後も、折れ面を作業面や打面として、剥片の剥離が試みられる。ソフトローム上面で出土し、技術的にも旧石器の可能性があるため、この石核が出土したH9グリッドを中心にローム層の調査を行ったが、石器は出土しなかった。S5は砥石で、流紋岩製。表裏両面が主な砥面として用いられる。土星付近からの出土なので、土星の築造時に使われたものかもしれない。

第3節 坂長35号墳の調査

1. 概要

坂長35号墳は、坂長下門前遺跡3区内の南西部、K4グリッドを中心位置する円墳である。標高89.3m～90.2mの丘陵稜線上に築かれている。調査前の状況では高さ約85cmの不整形な地形の高まりであった。伯耆町教育委員会が平成17年度に古墳をほぼ横断する形で試掘トレンドを入れたが、断面は黒色土のみであったため、古墳ではない可能性が高いとされていた。この結果を受け、調査は古墳であるかどうかを確認するために、裾から周溝を探す目的で十字にトレンドを入れた。確認は得られず、埋葬施設の有無を調べるため中央部にもトレンドを入れたところ、ようやく棺の裏込めと推定される粘土塊を土層断面で確認した。この時点で棺痕跡と推定される部分の半分ほどは失われていた。結果的に調査の手順が適切でなく埋葬施設の調査が不十分になった点は反省しなければならない。

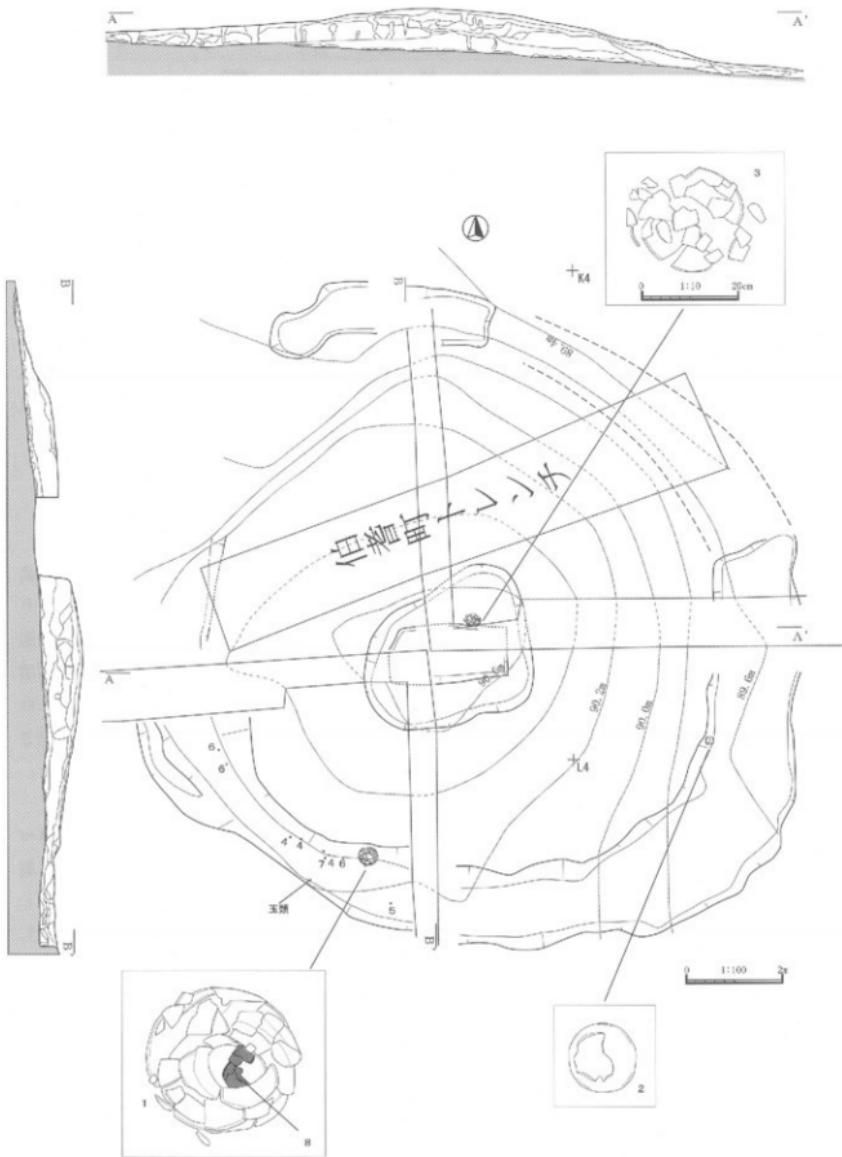
径12.0m、高さ1.1mの円墳で、幅0.9m～2.3m、深さ約10～30cmの周溝がめぐる。埋葬施設ははつきりしないものの、木棺直葬と推定される。主体部からは古墳に関係する遺物は出土しなかった。周溝からは2点の土師器壺などの土師器と滑石製・ガラス製の玉類が、墳頂からは須恵器壺が出土した。多く出土した土器の年代から、5世紀第3四半期の築造と考えられる。土器には原位置に正立していたものがあったことや封土最上層の粘質土が残っていたことから、未盗掘であったと判断される。

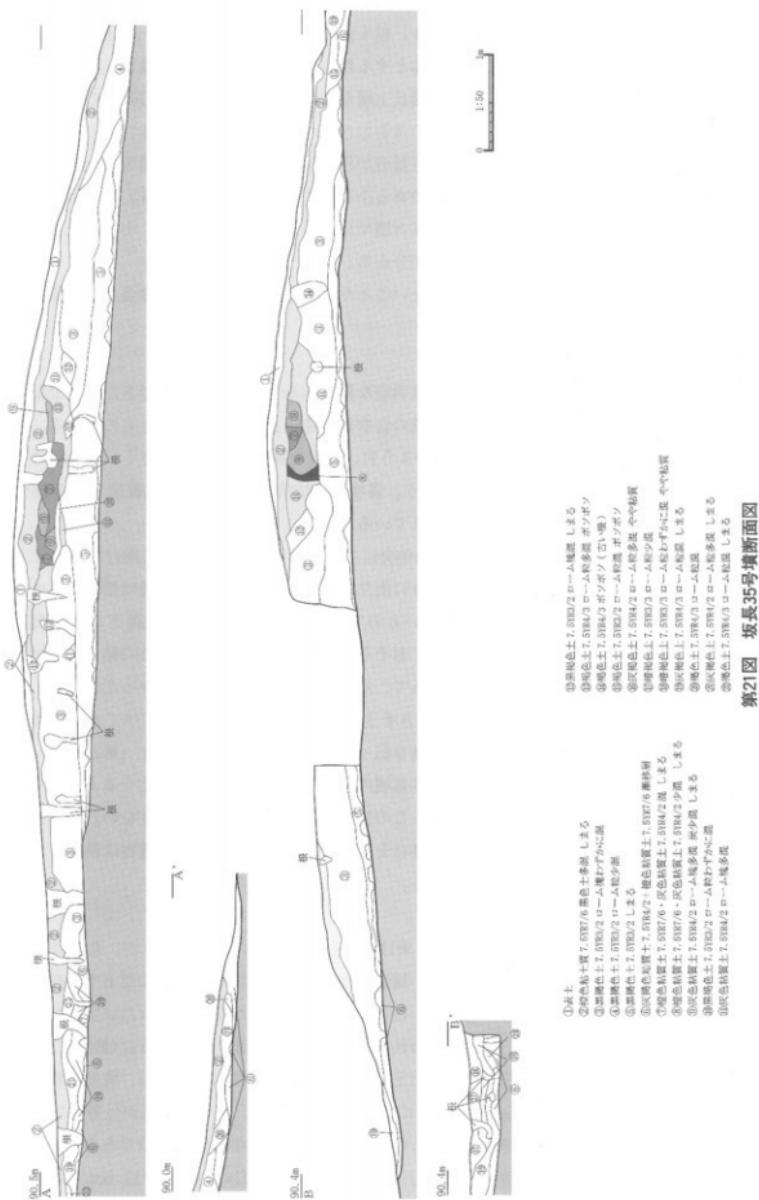
2. 遺構と遺物

墳丘（第20・21図 図版II）

墳丘は最大径12.0mの円形に復元される。周溝底からの高さ1.1mを測り、北西部約4分の1は後世の山道によって削られている。径に比して高さが著しく低いため、外観は非常になだらかである。

土層断面を観察すると、墳丘の下半は黒色土・漸移層・ローム層という自然の層序が保たれていることや、盛土の主体となる黒色土に少量のローム粒が含まれること、この黒色土は中央で途切れていることが注目される。このことから、墳丘の築造方法は概ね次のように推定される。1) まず、墳丘





をつくる範囲で地面を削ってしまりの良い黒色土の面を露出させる。2) 棺を乗せる部分を残して、周辺から集めた黒色土を厚さ約40cmに盛る。3) 棺を置いた後でその周囲をローム層の粘土で固め、さらに盛土との間を漸移層からの粘質土を主体とする粘土で充填する。4) 最後に、墳丘全体を厚さ約15cmのローム層出来の粘土で覆う。なお、墳丘上層からは弥生時代後期の甕口縁部の細片（第23図14）が出土しており、坂長下門前遺跡3区内の遺物包含層が盛土に使われた可能性を示唆している。

墳頂には、棺のすぐ横にあたる位置に、須恵器壺が正立して残されていた（図版13-3）。第23図3で、外面は平行タタキで仕上げ、内面は凹凸のある小石のような當て具を用いる。底部は小さく打ち欠かれている。6世紀第1四半期のもので、本古墳では最も新しい遺物であり、小規模な古墳ながら長期間にわたって祭祀が続けられていたことが分かる。

墳丘表面から埋葬施設までわずか15cmしかないことや、封土の大半がしまりの良くない黒色土で作られていることが本古墳の大きな特徴である。

埋葬施設（第22図 図版12・13）

埋葬施設は墳丘中央に1基存在する。これは明瞭な掘り込みや棺痕跡で確認できたものではなく、土色や土質の微妙な色合いの差、特にローム塊の含有量の違いをもとに検出したものである。墓壙は不整形で、東西3.5m南北3.0mを測る。上述のように、墳丘を掘り込むのではなく、中央だけ土を盛らずに形成したため不整形になったのであろう。墓壙の、棺内および棺周辺と推定される部分以外は、ローム塊を多く含む灰色粘質土で埋められている。

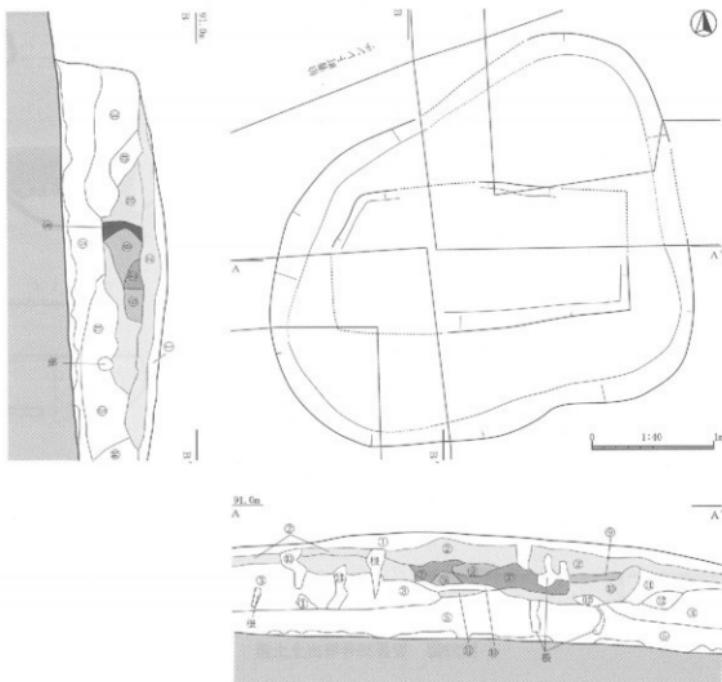
棺痕跡は長さ2.4m、幅1.2mを測り、墓壙の中央に主軸をちょうど東西方向に向けて位置する。墳丘の南北断面において確認される、30cmの高さに直立する厚さ7~18cmの粘土塊は棺の裏込めと思われる。この隣の土には炭化物が少量含まれているので、棺内土であろう。棺痕跡とした範囲は主にロームを主体とする土で構成される。これは、おそらく棺が腐食した後に裏込めの粘土塊が棺内の空間に倒れ込んだ状況を表している。したがって、木棺本体は、もう少し小さかったはずで、土層断面からは幅40~60cm、長さ180cm程度に復元できそうである。棺内部分の土はすべて水洗選別を行ったほか、トレンチを掘削する際にも細心の注意を払ったが、弥生土器底部の細片（第23図15）が1点あった他に遺物はなかったので、棺内あるいは墓壙内への副葬品に、腐食に耐えうるようなものはなかったと推定される。そのため、埋葬施設からこの古墳の年代を知ることはできない。なお、墳丘を除去する調査過程において、他の埋葬施設の存在を疑わせるような粘土などや遺物は検出されなかつたので、埋葬施設はこの1基のみと考えられる。

周溝（図版14・15）

幅0.9m~2.3m、深さ10cm~30cmを測る。本来は墳丘を1周していたであろうが、北半は一部を除き後世の山道により失われている。全体に浅い周溝であるが、地表面を掘り込んだ上で墳丘が築造されていると考えられるので、築造時の地表面からは50cm程度の十分な深さがあったはずである。

周溝内からは、南西部を中心に、祭祀に使われた土師器と玉類が出土している。（第23・24図）

第23図1は周溝内墳裾から直立した状態で出土した壺である。有段口縁をもち、肩部に粗雑な綾杉文を2段に刻む。底部は13cm×5.5cmの長方形に打ち欠かれている。下半には縫が付着している。かなり退化した古墳時代前期の要素が認められるので、5世紀第1四半期頃のものであろう。この壺の中からは5世紀第3四半期の坏8が出土した。壺1の頸部は最も広いところで11.5cmであるのに対し、坏8の最大径は12.5cmあるため、壺を壊さなければ押し込むことはできない。実際、壺1に渡ら



■黒土		■黒色地被土 7.5YR/6 黒色土多量 しまる
■褐色地被土 7.5YR/6 黒色土多量 しまる		■褐色地被土 7.5YR/3 ローム多量 ボソソ
■褐色地被土 7.5YR/3/2 ローム清々かげに黒		■褐色地被土 7.5YR/4 ボソボソ (良い匂)
■赤褐色地被土 7.5YR/3 ローム少量 黄		■赤褐色地被土 7.5YR/3 ボソボソ
■黒褐色地被土 7.5YR/2/2 しまる		■黒褐色地被土 7.5YR/2 ローム少量 清々やや黄質
■灰褐色地被土 7.5YR/1/2-1 黑色地被土上 7.5YR/7 黃褐色		■灰褐色地被土 7.5YR/2 ローム少量 黄
■褐色地被土 7.5YR/11 黑色地被土上 7.5YR/2 しまる		■褐色地被土 7.5YR/2 ローム少量 黄
■褐色地被土 7.5YR/7 黄褐色地被土 7.5YR/2 2 滴水 しまる		■褐色地被土 7.5YR/3 ローム少量 黄
■褐色地被土 7.5YR/7 黑色地被土 7.5YR/2 多量 條状混		■褐色地被土 7.5YR/3 ローム少量 黄
■褐色地被土 7.5YR/3 ローム少量 條状混		■褐色地被土 7.5YR/3 ローム少量 黄
■褐色地被土 7.5YR/3 ローム少量 黑		■褐色地被土 7.5YR/2 ローム少量 黄
■褐色地被土 7.5YR/3 ローム多量 黄		■褐色地被土 7.5YR/3 フローム少量 黄

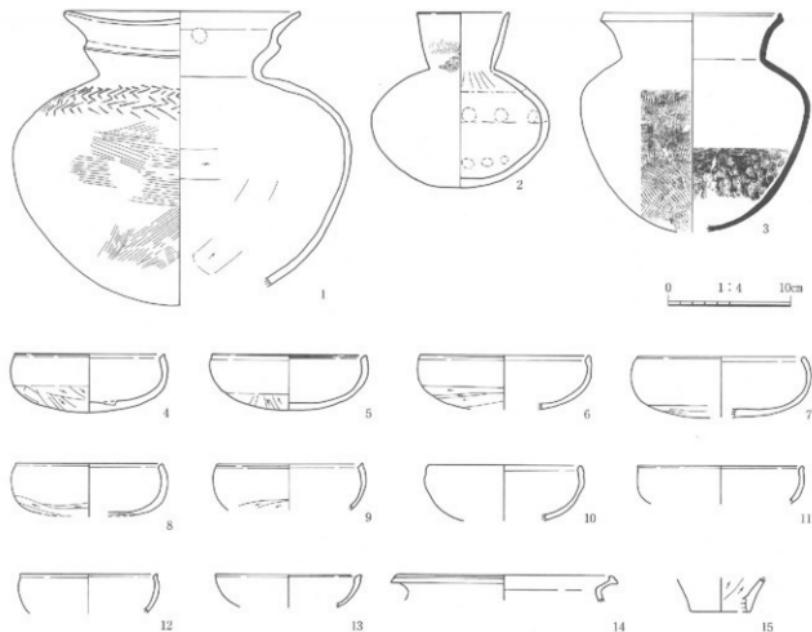
第22図 板長35号墳埋葬施設

れた良好な出土状態にもかかわらず、坏8には約4分の1の欠落部分があるので、打ち欠いた部分を回して押し込んだと思われる。2つの土器の内部の土を水洗選別したが、何も見つからなかった。

壺1の周辺からは、他に9個体分の壺が周溝埋土および底面直上から出土した。いずれも5世紀第三四半期のもので、完形に復元できるものはない。祭祀の終了後に壊されているかもしれない。

周溝内では東南部からも土器が出土している。第23図2は墳壠に正立していた壺である。底部に穿孔はなく、他の土師器とは違って完形で供えられていたと考えられる。他の壺などと同じ5世紀後半期のものであるが、この土器だけ離れているので、別の機会に用いられたものかもしれない。

周溝の南端近くからは玉類が出土している（第24図）。現場で確認できたものはいずれも周溝外縁側の底面上で出土している。多くは底面付近の土から水洗選別によって採取した。したがって、まだ

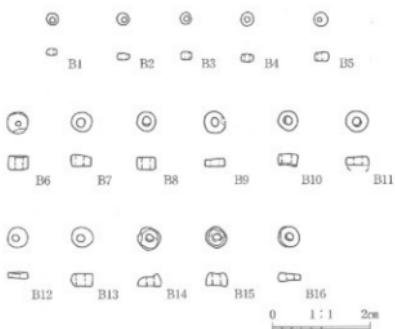


第23図 坂長35号墳出土土器

第23図 遺物観察表

*復元値 △現存値

番号	種類	通 緒 位	施 器 部	口 径 直 径 (cm)	深 さ (cm)	文様 ・調整	施 装	土 成	色 調	備 考
1	周溝 土器	土器部 底面以上		19.1	24.1	外面：ヨコナギ 審査以下ハケメイ 黄褐色粒付2枚 内面：二種類ヨコナギ 以下ケズリ、ナメ	密 2mm以下の砂粒を多く含む	内外面：灰い黄褐色	下部外腹フサ付茎 底部打ち欠き	
2	周溝 土器	土器部 底面以上	土器部 底面	7.5	14.4	外面：土デ 内面：口縁部ヨコナギ 以下ケズリ後ナデ	密	内外面：褐色		
3	周溝 土器	底面 底面付近	土器部 底面	14.5	18.0	外面：斜面以上上端丸ナデ 以下平付タタキ 内面：施装以上斜面丸ナデ 以下出で凸痕	密 細かい砂粒を含む	内外面：灰赤	底部打ち欠き	
4	周溝 土器	土器部 底面以上	土器部 底面	12.2	4.5	外面：ヨコナギ 底面ケズリ後ナデ 内面：ヨコナギ 底面ナデ	密	内外面：褐色		
5	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	12.5	4.5	外面：ヨコナギ 施装ケズリ後ナデ 内面：ヨコナギ 施装ケズリ	密 良好	内外面：褐色		
6	周溝 土器	土器部 外		*13.7	△4.4	外面：ヨコナギ 施装ケズリ 内面：ヨコナギ 施装ケズリ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：明褐色	
7	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	*13.6	5.0	外面：ヨコナギ 施装ケズリ後ナデ 内面：ヨコナギ 施装ケズリ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：明褐色	
8	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	12	4.1	外面：ヨコナギ 施装ケズリ 内面：ヨコナギ 施装ケズリ	密 良好	砂粒をわずかに含む	内外面：褐色	壺1内に入られて出土
9	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	*11.9	△3.7	外面：ヨコナギ 底面ケズリ 内面：ヨコナギ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：明褐色	
10	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	*12.4	△4.5	外面：ヨコナギ 内面：ヨコナギ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：明褐色	
11	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	*13.6	△3.1	外面：ヨコナギ 内面：ヨコナギ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：明褐色	
12	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	*11.2	△3.2	外面：ヨコナギ 内面：ヨコナギ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：褐色	
13	周溝 土器	土器部 外	土器部 外	*11.9	△2.7	外面：ヨコナギ 内面：ヨコナギ	密 良好	細かい砂粒を含む	内外面：明褐色	
14	周溝 土器	施装部 外	施装部 外	*17.3	△2.1	外面：ヨコナギ 施装部：施装粒 内面：口縁部ヨコナギ	密 良好	細かい砂粒を多く含む	内外面：淡黃褐色	
15	周溝 土器	施装部 外	施装部 外	*5.0	△2.8	外面：ナデ 内面：タヌ	密 良好	内外面：淡青色		



第24図 坂長35号墳出土玉類

第24図 遺物観察表

△復元前

遺物 番号	埋立 番号	埋立 位置	種類	外径 (mm)	大きさ (mm) 内径	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	備考
B1	24	周溝 底面	小玉	2.6	1.2	1.4	0.1	ガラス	淡青色
B2	24	周溝 底面	小玉	2.8	0.9	1.7	0.1	ガラス	淡青色
B3	24	周溝 底面	小玉	2.5	0.8	2.0	0.1	ガラス	淡青色
B4	24	周溝 底面	小玉	2.9	1.3	1.7	0.1	ガラス	淡青色
B5	24	周溝 底面直上	小玉	3.0	1.3	2.0	0.1	ガラス	淡青色
B6	24	周溝	小玉	4.5	1.0	2.0	0.1	滑石	
B7	24	周溝	小玉	4.5	1.2	2.2	0.1	滑石	
B8	24	周溝	小玉	4.2	1.5	2.5	0.1	滑石	
B9	24	周溝	小玉	4.5	1.4	1.5	0.1	滑石	
B10	24	周溝 底面直上	小玉	4.3	1.6	2.3	0.1	滑石	
B11	24	周溝 底面直上	小玉	4.5	1.4	△1.4	0.1	滑石	
B12	24	周溝 底面直上	小玉	4.2	1.5	1.3	0.1	滑石	
B13	24	周溝 底面直上	小玉	4.4	1.5	3.3	0.1	滑石	
B14	24	周溝	小玉	4.9	1.5	2.1	0.1	滑石	
B15	24	周溝	小玉	4.5	1.5	1.8	0.1	滑石	
B16	24	周溝	小玉	4.5	1.5	1.8	0.1	滑石	

周溝に土砂が流入していない、古墳の築造後間もない時期の祭祀で使われたものと思われる。しかしながら、南側には隣接して坂長34号墳が所在するので、34号墳に関係する遺物である可能性も排除できない。ガラス玉は5点出土した(B1~B5)。いずれも淡青色で、径2.5~3.0mm、厚さ1.4~2.0mmの、ごく小さいものである。一連で用いられたものと思われる。滑石製小玉は完形品が27点、破片が6点出土している(B6~B16)。大きさの平均は径4.5mm、厚さ2.2mmである。素材になった滑石は劈開性がやや強いようで、輪切りの方向に2分あるいは3分しているもので完形か破片か区別し難いものがある。本来の厚さは約3mmになるであろう。

埋葬施設からの出土遺物がないため、坂長35号墳の年代を決定するには、周溝の出土遺物をもとにすることになる。最も古い壺1は、穿孔されているにもかかわらず煮炊きの痕跡がある。使用歴のある古い土器を祭祀に再利用していると考えれば、築造年代は土器よりも少し新しく考える必要がある。あるいは、壺1はより古い他の古墳に樹立されていたものを持ってきたのかもしれない。周溝出土の土器のはとんどが5世紀第3四半期の年代が与えられること、特に壺1と壺8が同時に使われていることは重要である。また、滑石製小玉の出土状況は、古墳の築造からそう時間を経ていない時期に遣されたことを示唆している。以上から5世紀第3四半期の年代をあてるのが妥当と思われる。

参考文献

岸本町誌編さん委員会編 1983『岸本町誌』

伯耆町教育委員会編 2007『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』

第4章 坂長ヨコロ遺跡の調査

第1節 立地と基本層序

坂長ヨコロ遺跡は越敷山から北へ派生する丘陵の先端部に位置する。1区が丘陵尾根上、2区が狭窄な谷部にあたり、いずれも比較的急な斜面地となっている。標高は1区の最高所が83.3m、2区の北西端が58.7mであり、遺跡内では約24.6mもの比高差がある。

2区では標高の低い北側で加工段が上下、二段にわたり造成されている。造成された時期は判然としないが、上層を中世から近世にかけての遺物包含層に覆われていることから中世以前の可能性が高い。加工段の幅は1~9mと一定ではなく、また、平坦面に遺構がみられないことなども勘案すると、古道であった可能性が考えられる。

また、2区の北東側の斜面裾部は崖状となり、本来の地形を留めていない。遺跡北側の水田域は以前溜め池であったという伝承が残っており、この地形変化は溜め池の浸食作用によるものかもしれない。

調査前の現況は1、2区とも山林である。

各調査区の基本層序は以下のとおりである（第25・27図）。

1区 I層：黒褐色シルト。最大30cmの厚さで堆積する。土師器の細片を僅かに含む遺物包含層であるが、堆積時期は特定できない。

II層：黒灰褐色シルト。5~10cmの厚さで堆積する。1層と3層の漸移層である。無遺物層である。

III層：にぶい黄褐色粘土。ローム層。

IV層：橙褐色粘土。ローム層。

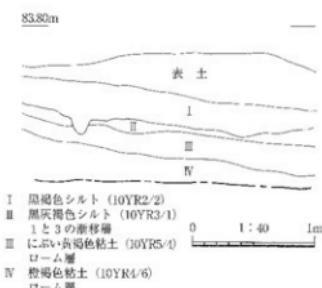
2区 1層：暗褐色シルト。調査区北半に形成された段状の地形に厚く堆積する。厚さは20~30cmである。古墳時代中期のSI1を覆っており、土師器、須恵器、陶磁器などを含む。中世から近世にかけての遺物包含層と考えられる。

2・3層：にぶい赤褐色粘土。1区の4層より下部のローム層と考えられる。

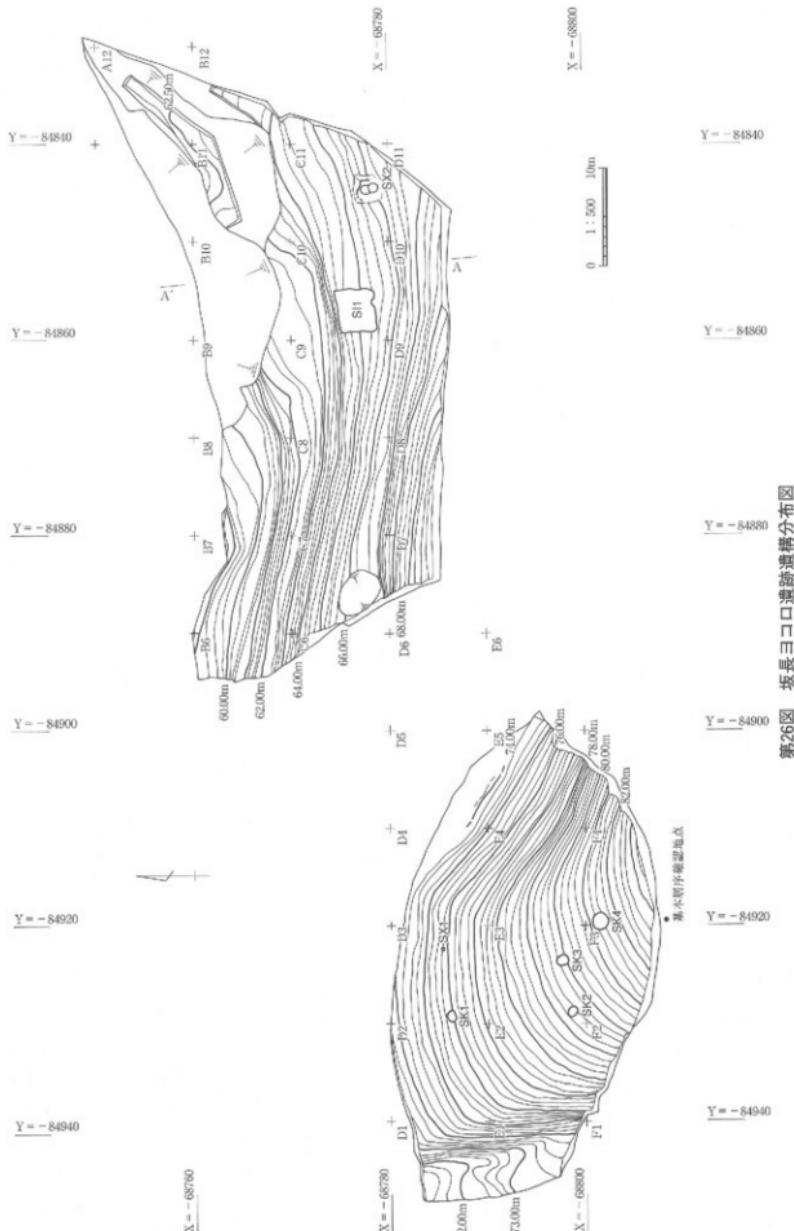
4・5層：黒褐色シルト質粘土。ローム層。礫を多量に含む。

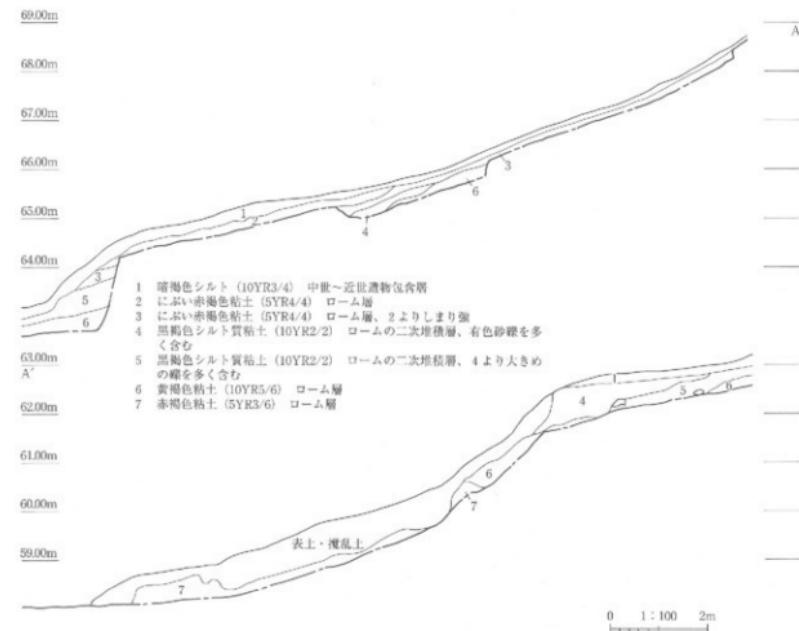
6層：黄褐色粘土。ローム層。砂礫を含む。

7層：赤褐色粘土。ローム層。



第25図 1区土層断面図





第27図 2区土層断面図

第2節 1区の調査

1. 概要

縄文時代の落とし穴と考えられる土坑4基、中世墓1基を確認した。出土遺物はごく僅かで、落とし穴から縄文土器や石鏃、中世墓から骨壺として使用されたと考えられる備前焼壺が出土している。

2. 遺構と遺物

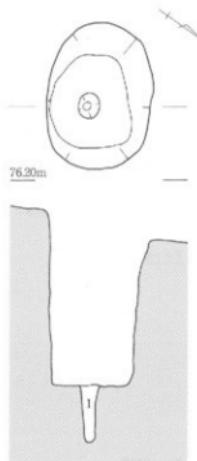
落とし穴

SK1 (第28図 図版19)

D3グリッド、標高73.0mの斜面に位置する。平面形は長軸1.2m、短軸85cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.5mである。底面の中央には径20cmの小穴があり、深さは45cmである。遺物は出土していないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

SK2 (第29図 図版19)

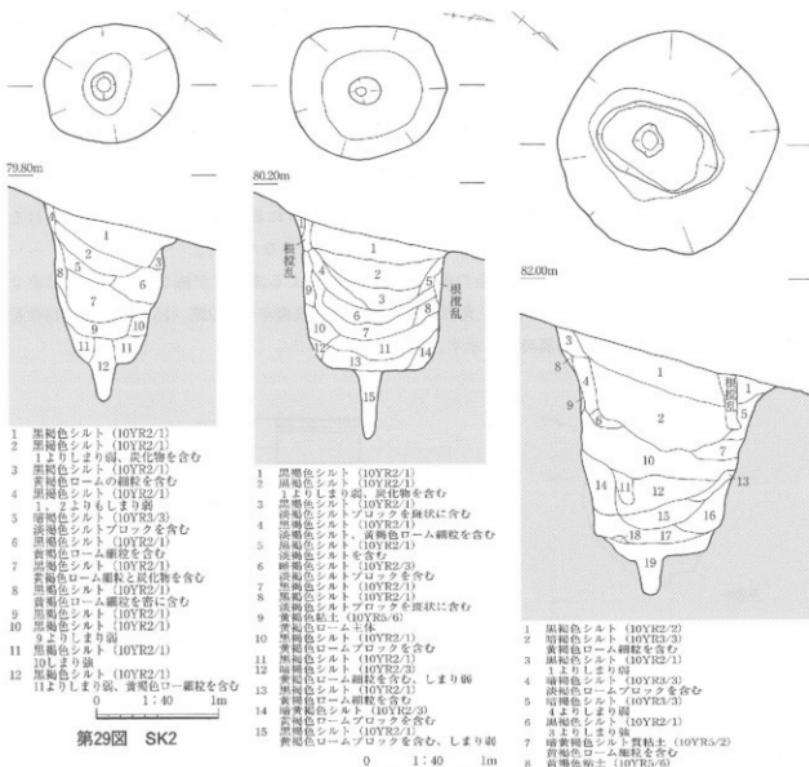
E3グリッド、標高79.5mの斜面に位置する。平面形は長軸1.1m、短軸96cmの円形を呈する。検出面からの深さは1.4mである。底面の中央には径22cmの小穴があり、深さは30cmである。遺物は出土していないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。



1 黒褐色シルト (10YR2/1)

0 1:40 1m

第28図 SK1



第29図 SK2

第30図 SK3



第31図 SK4出土遺物



第31図 SK4

SK3 (第30図)

E3グリッド、標高79.9mの斜面に位置する。平面形は長軸1.3m、短軸1.1mの円形を呈する。検出面からの深さは1.15mである。底面の中央には径27cmの小穴があり、深さは55cmである。埋土中から縄文土器片が出土した。縄文時代後期または晩期の落とし穴と考えられる。

SK4 (第31・32図)

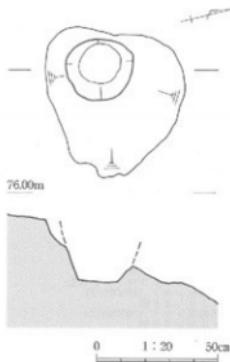
F4グリッド、標高81.4mの斜面に位置する。平面形は長軸1.8m、短軸1.7mのやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは1.6mである。底面のほぼ中央には24cmの小穴があり、深さは30cmである。遺物は埋土中から縄文土器の細片、石鎚S1が出土している。詳細な時期は特定できないが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

中世墓

SX1 (第33・34図 図版19)

D3グリッド、標高75.8mの急斜面に位置する。墓壙内から蔵骨器とみられる備前焼壺が出土し、火葬墓と考えられる。備前焼壺は表土剥ぎ中に重機により掘り起こしてしまったため、正確な出土状況は明らかにしえない。ただし、遺構の周辺は包含層が遺存せず、急斜面のため堆積層が著しく流出し、備前焼壺の上半がすでに表土中に露出してしまっていたものと推測される。確認できた墓壙は径27cmの円形を呈し、蔵骨器とほぼ同じ大きさで掘られたと考えられる。備前焼壺内部に副葬品はなく、流入していた土壤を全量採取し洗浄したが、骨片等も回収できなかった。

備前焼壺1は高さ38.6cmで、肩部に二条の直線文と櫛書きによる波状文が施される。頸部は直立し、口縁の玉縁は小さく、断面形がやや三角形ぎみとなる。重根編年IVB-2期（15世紀中頃～16世紀初頭）に比定され^①、本遺構の帰属時期を示す。



第33図 SX1



第34図 SX1出土土器

第3節 2区の調査

1. 概要

古墳時代中期の堅穴住居跡1棟、中世墓1基を検出した。遺物は包含層中から土師器、須恵器、陶磁器、灯籠、鉄製品などが出土している。なかでも、中世に比定される遺物の出土が目立ち、少量ながら貿易陶磁や灯明皿が含まれている点は特筆される。

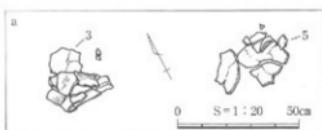
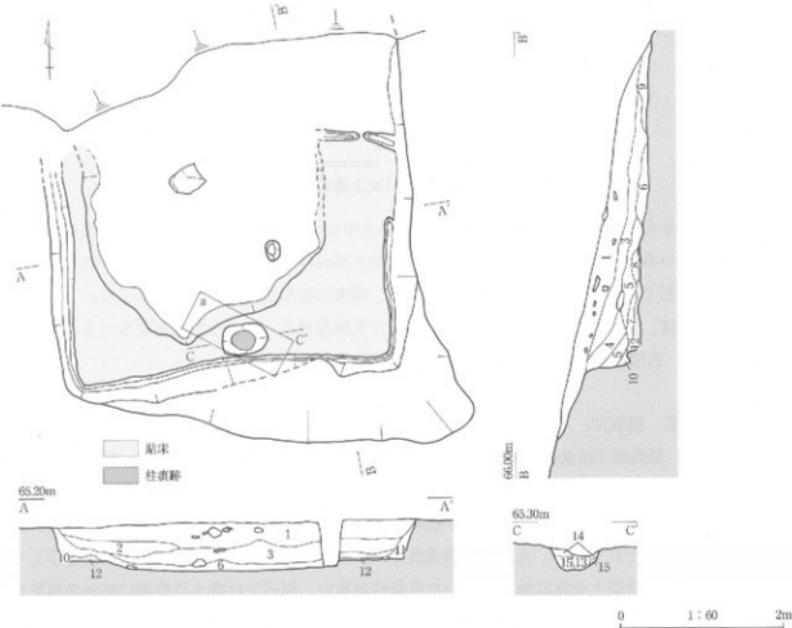
2. 遺構

竪穴住居跡

SI1 (第35・36図 図版21)

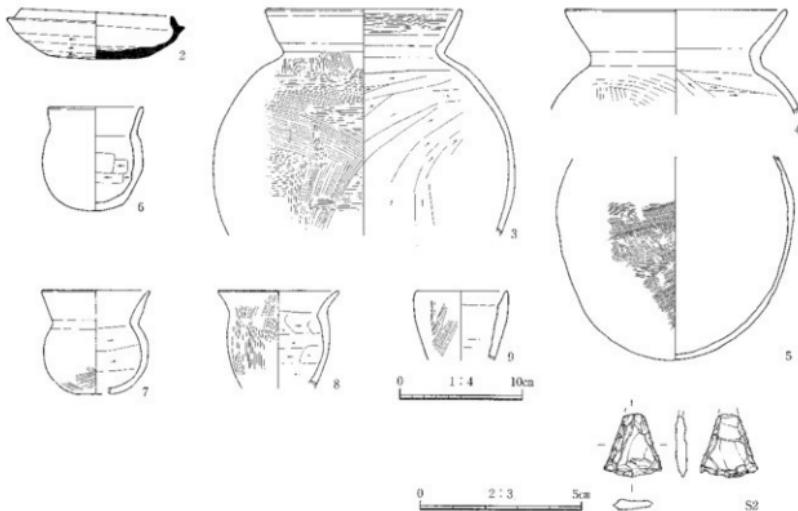
C8グリッド、標高65.3~64.4mの緩斜面に位置する。南側は中世以降の地形改変や流出により造存していない。平面形は長辺4m以上、短辺4.5mの方形、または長方形を呈する。壁高は最大56cmで、北壁、および東西壁際には幅14cm、深さ10cmほどの周壁溝が巡る。南半の床面には壁面に沿ってコの字状に盛土が施され、いわゆるベッド状遺構と考えられるが、形状は歪で、幅も20~90cmと一定しない。盛土の厚さは1~6cmで、地山のロームブロックを主体とする。

主柱穴は北壁沿いで1基(P1)のみ確認した。本来は南壁沿いにP1に対応する主柱穴が存在したとみられ、2本柱で上屋を支える構造であったと推測される。P1は長軸56cm、短軸36cmの楕円形を呈し、径22cmの柱痕跡が確認されている。



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 極大の礫を多く含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/4) 炭化物を多く含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/4) 炭化物を多く含む
- 4 黑褐色シルト (10YR3/3)
- 5 黑褐色シルト (10YR3/3)
- 6 黑褐色シルト (10YR3/2)
- 7 黑褐色シルト (10YR2/3)
- 8 黑褐色シルト (10YR3/3)
- 9 黑褐色シルト (10YR3/4)
- 10 黑褐色シルト (10YR3/4)
- 11 墓黄褐色シルト (10YR3/4) 棕褐色ロームブロックを含む
- 12 墓黄褐色シルト (10YR3/4) 決褐色ロームブロック主体 貼床
- 13 黑褐色シルト (10YR2/3) 贊臓跡
- 14 墓褐色シルト (10YR3/4)
- 15 墓褐色シルト (10YR3/3)

第35図 SI1



第36図 SI1出土遺物

遺物は検出面から須恵器壺（2）、床面、および埋土中から土師器壺（3～5）、小型丸底壺（6～8）が出土している。また、床面の中央付近からは38×30cmほどの扁平な碟が据え置かれたような状態で出土し、台石として利用された可能性もあるが、明確な使用痕は確認できなかった。

本遺構の時期は、床面、および埋土中から出土した土師器壺3、4、小型丸底壺6～8が天神川VI期に比定され³⁰、古墳時代中期（5世紀中葉頃）と推定される。

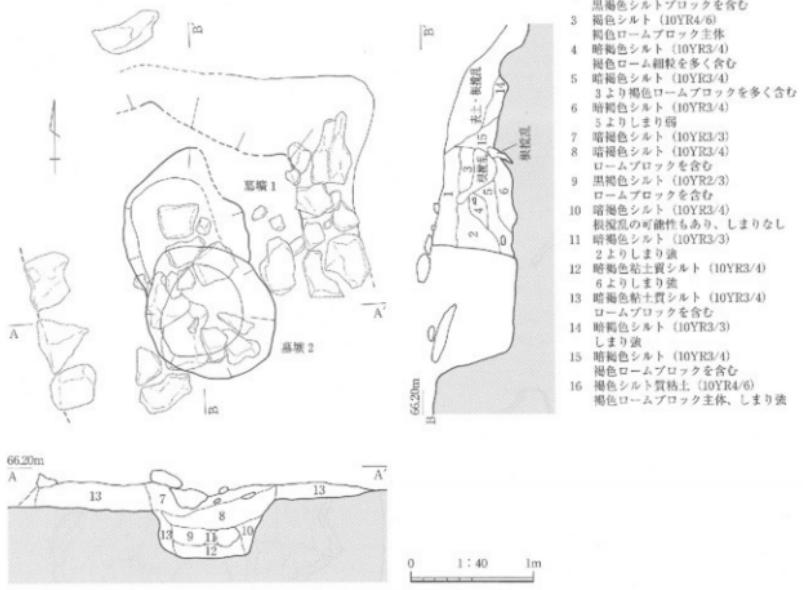
中世墓

SX2（第37・38図 図版20）

C11グリッド、標高66.0m前後の緩斜面に位置する中世墓である。やや歪ながら一辺2.7mほどの方形の盛土に貼石が施されている。盛土は現状で最大20cmの厚みがあり、斜面下方に厚く盛られていたと考えられる。暗褐色シルトの単層で、掻き回された様子は窺えない。貼石は盛土の東西辺、および墓壙上面付近に置かれている。北辺では根掘乱等により盛土が流出しているため貼石が遺存していないが、本来、貼石は盛土全体に施されていた可能性が高い。西辺では盛土の肩部に40cm角程度の角碟が一列に並んでいる状況が窺えるが、その他の貼石に規則性は認められない。貼石は同一の石材で、周辺の基盤層に由来する角碟が使用されている。

墓壙は盛土中央で2基検出され、重複関係から墓壙1→墓壙2の順に形成される。いずれの墓壙も土層断面や底面に棺痕跡は確認できないことから棺を用いずに土葬したものと考えられる。墓壙1は長軸1m以上、短軸1.0mのやや歪な長方形形状を呈し、深さは65cmである。墓壙2は長軸1.2m、短軸1.0mの円形を呈し、深さは59cmである。

盛土中から土師器壺（10）、墓壙1の埋土中から土師器皿（11）が出土している。本遺構の時期は出土土器が八幡編年³¹の中世II期に比定されることから、平安時代末頃（12世紀）と考えられる。



第37図 SX2

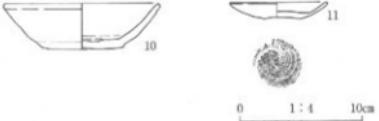
3. 遺構外出土遺物

第39、40図は土器、土製品である。12~20は古墳時代中期から古代に比定される。17、18は移動式竈で、同一個体の可能性がある。17は掛口から胴部上半の破片で、外面に突帯が巡る。19は土師器壺の底部で、内外面ともミガキが比較的丁寧に施されている。底部外面には墨書があるが、判読できない。21~28、32~36、39~41は中世に比定される。21~25はロクロ成形の土師器壺、または皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。24は灯明皿である。26~28は手捏ね成形で、いわゆる京都系土師器皿と考えられる。31~33は輸入陶磁である。31は朝鮮陶磁の皿で、内面に焼成時の砂目が残る。32、33は青花で、32は小野分類^[4]の碗B群、33は皿C群で基筒底である。35、36は中世須恵器で、亀山系か。39、40は備前焼壺、41は常滑系の壺か。43は肥前系磁器である。

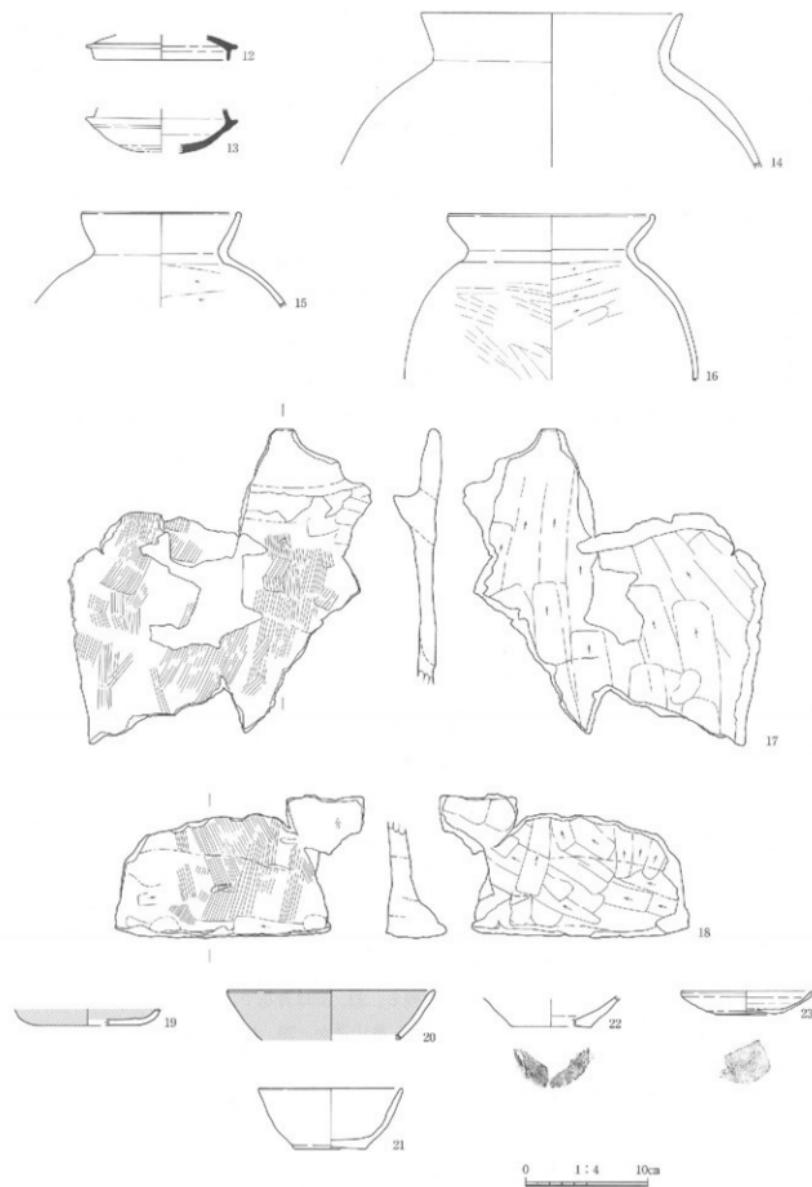
第41図は石器である。S3は黒曜石製の石鎚で、凹基である。S4は磨石、S5は敲石、S6は石鍬である。第42図S7は灯籠の火袋で、内面に繩の痕跡が明晰に残る。

第43図F1は丸盤で、留金具と柄の木質が遺存する。近世以降の所産と考えられる。

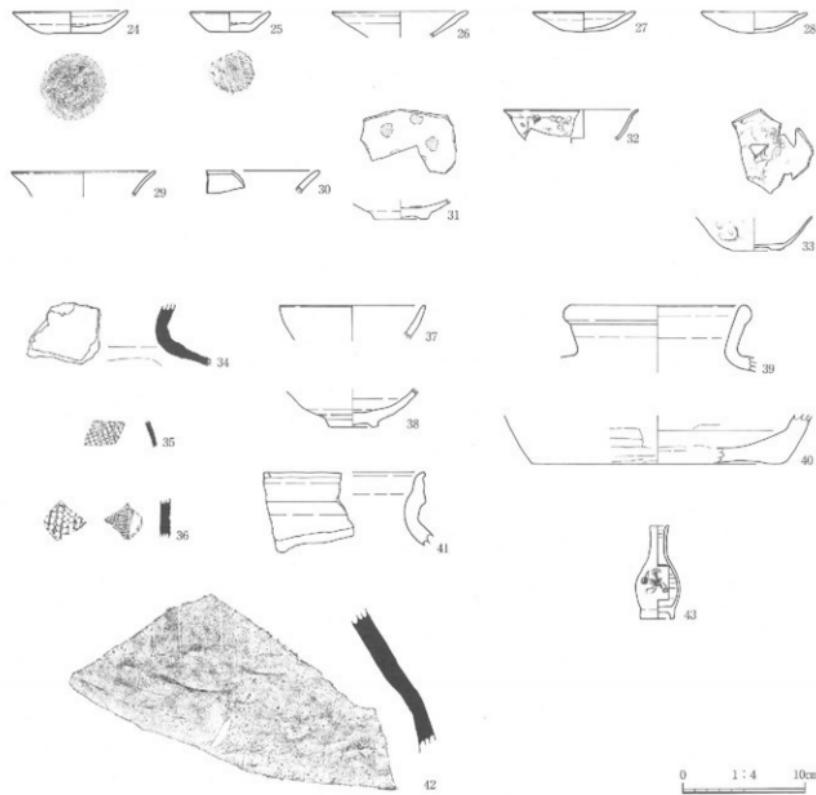
第43図C1~4は銅錢で、いずれも1層から出土している。C1、2は元豊通寶（1078年初鋤）、C3は紹聖元寶（1094年初鋤）、C4は寛永通寶で、いわゆる古寛永である。



第38図 SX2出土土器



第39図 遺構外出土遺物（1）



第40図 遺構外出土遺物（2）

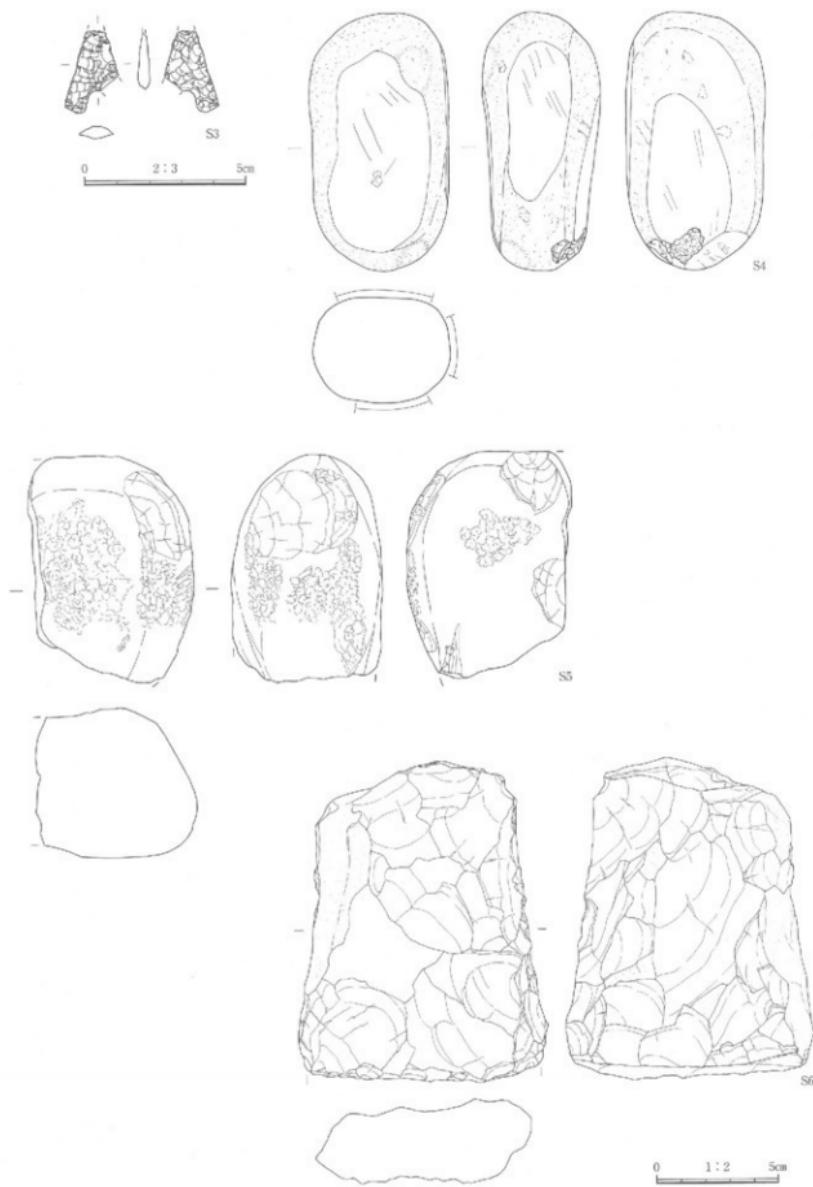
註

- (1) 重根弘和 2008 「備前焼分類試案」『第7回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における備前焼』
- (2) 牧本哲雄 1999 「第9章第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅲ・Ⅳ第6遺跡』鳥取県教育文化財団
- (3) 八幡興 1998 「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究会
- (4) 小野正敏 1981 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会

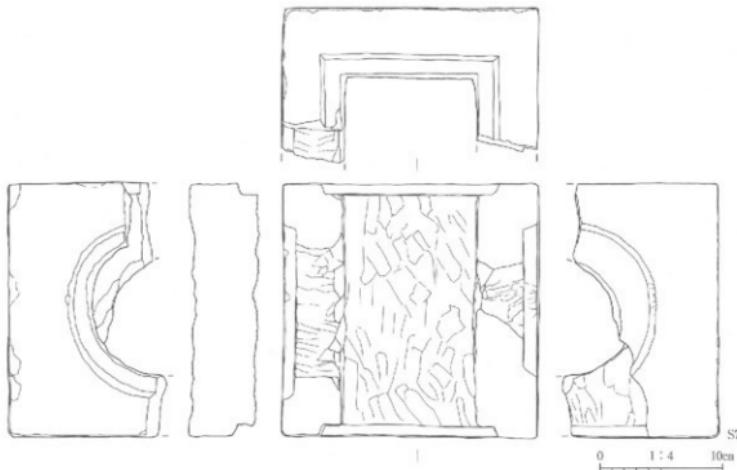
坂長ヨコロ遺跡土器觀察表

※元値 △段落長

通物 件番号	神 名	通 路 番号	構 造 位 置	種 別	口径(cm)	底径(cm)	器高 (cm)	文様・駆鑿	物 説	土 成	色 調	備 考
1 34	SX1		海苔板 皿	海苔板	12.9 16.3	30.6	外面：海苔波状文 深縁 2条 内面：ヨコナデ	密 良好	にぶい黄褐色～透黄色			
2 35	SII 横山路		海苔器 皿	海苔器	*12.3	3.0	外面：ヨコナデ 天井部凹輪ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	密 良好	灰褐色	ヘラ記号「X」		
3 36	SII 横山路		上端器 皿	上端器	*15.6	18.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ 錐脚部以下ヘラケズリ	細かい印模を含む 良好	褐色			
4 36	SII 下盤		上端器 皿	上端器	*16.0	18.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ 錐脚部以下ヘラケズリ	良好	にぶい黄褐色			
5 35	SII 床表		上端器 皿	上端器	*16.7	16.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ 錐脚部以下ヘラケズリ	4mm以下の鉢軽を含む 良好	褐色～暗褐色			
6 35	SII 下盤		上端器 皿	上端器	*7.6	8.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ 錐脚部以下ヘラケズリ	2mm以下の鉢軽を含む 良好	にぶい黄褐色			
7 35	SII 床表		上端器 皿	上端器	*6.6	6.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ 錐脚部以下ヘラケズリ	細かい印模を含む 良好	にぶい褐色			
8 35	SII 壁上土		上端器 皿	上端器	*9.8	8.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ 錐脚部以下ヘラケズリ	細かい印模を含む 良好	にぶい黄褐色			
9 35	SII 壁上土		上端器 皿	上端器	*7.3	6.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ	細かい印模を含む 良好	褐色			
10 38	SX2 盛土中		上端器 皿	上端器	*12.6 6.7	3.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 高脚凹輪孔切引	細かい印模を含む 良好	褐色			
11 39	SX2 墓地1		上端器 皿	上端器	8.0 3.1	1.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 高脚凹輪孔切引	細かい印模を含む 良好	褐色			
12 39	鉢		圓底器 坪蓋	圓底器	*10.9	△2.0	外外面：ヨコナデ	密 良好	灰褐色			
13 39	1層		圓底器 坪身	圓底器	△3.5	△2.5	外外面：ヨコナデ	密 良好	灰褐色			
14 39	1層		上動器 皿	上動器	*21.4	△2.5	外外面：ヨコナデの内側裏不規 内面：ヨコナデ ハケ以下ヘラケズリ	密 良好	にぶい褐色			
15 39	1層		上動器 皿	上動器	*12.8	△7.5	外外面：ヨコナデの内側裏不規 内面：ヨコナデ ハケ以下ヘラケズリ	密 良好	にぶい褐色			
16 39	1層		上動器 皿	上動器	*16.9	△13.5	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ	密 良好	褐色			
17 39	1層		上動器 皿	上動器	△24.7	△9.5	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ以下ヘラケズリ	5mm以下の鉢軽を含む 良好	にぶい黄褐色			
18 39	1層		上動器 皿	上動器	△11.7	△9.5	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ ハケ以下ヘラケズリ	9mm以下の鉢軽を含む 良好	にぶい黄褐色			
19 39	1層		上動器 坪	上動器	*8.4	△1.3	外外面：ヨコナデヘラケズリ 内面：ヨコナデ	密 良好	赤褐色	福士土器 外外面赤褐色		
20 39	1層		上動器 坪	上動器	*15.9	△4.1	外外面：ヨコナデヘラケズリ 内面：ヨコナデ ハラミガキ	5mmの鉢軽を含む 良好	にぶい灰褐色	外外面赤褐色		
21 39	1層		土端器 坪	土端器	*11.7 5.7	△4.9	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底割凹輪孔切引	密 良好	にぶい黃褐色			
22 39	1層		土端器 坪	土端器	*5.4	△2.3	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底割凹輪孔切引	密 良好	褐色			
23 39	邊縁外		上端器 坪	上端器	*10.7 △5.0	1.9	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底割凹輪孔切引	密 良好	黃褐色			
24 40	表土中		上端器 皿	上端器	9.3 5.1	1.8	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底割凹輪孔切引	密 良好	にぶい黃褐色	刀削目		
25 40	1層		上端器 皿	上端器	*5.3 3.6	1.6	外外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底割凹輪孔切引	密 良好	にぶい黃褐色			
26 40	邊縁外		上端器 皿	上端器	*10.9	△2.1	外外面：ヨコナデ	密 良好	にぶい黃褐色			
27 40	1層		土端器 坪	土端器	*5.3 3.5	1.65	外外面：ナデ	密 良好	淡黄色			
28 40	1層		土端器 坪	土端器	*5.2	1.7	外外面：ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	にぶい褐色			
29 40	1層		向背 底	向背	*11.7	△2.0	口洗げ 内外面底縫隙	密 良好	灰白色	近世以前？		
30 40	邊縁外		向背 底	向背	△1.8	△1.8	内外面底縫隙	密 良好	灰白色	近世以前？		
31 40	1層		圓底器 皿	圓底器	*4.4	△1.3	内外面底縫隙	密 良好	オリーブ灰色			
32 40	1層		青花 皿	青花	*11.0	△3.5	口縁が僅かに外反	密 良好	明暦灰青			
33 40	1層		青花 皿	青花	4.0	△2.7	西洋窓 内外面底縫隙	密 良好	明暦灰青			
34 40	1層		圓底器 皿	圓底器	△4.8	△4.8	外外面：ヨコタキ 内面：ヨコナデ ハケ以下ヘラケズリ	密 良好	淡青色			
35 40	1層		圓底器 皿	圓底器	△2.0	△2.0	外外面：ヨコタキ	密 良好	灰白色	鬼山系		
36 40	表土中		圓底器 皿	圓底器	△3.2	△3.2	外外面：ヨコタキ	密 良好	褐灰色	鬼山系		
37 40	1層		柴器 皿	柴器	*11.9	△2.8	内外面底縫隙	密 良好	にぶい青褐色			
38 40	1層		柴器 皿	柴器	4.0	△3.1	外外面底縫隙	密 良好	にぶい青褐色			
39 40	邊縁外		青花 器	青花	*14.0	△5.35	口縁玉 内外面コナデ	密 良好	褐灰色			
40 40	1層		青花 器	青花	*29.6	△4.9	外外面：ヨコナデ	密 良好	青褐色			
41 40	1層		青花 器	青花	△8.0	△8.5	内外面コナデ	密 良好	淡青色			
42 40	表土中		青花 器	青花	△8.5	△8.5	内外面コナデ	密 良好	灰褐色			
43 40	1層		青花 器	青花	1.5 2.7	7.6	外表面縫隙	密 良好	明暦灰青	肥前系		



第41図 遺構外出土遺物（3）



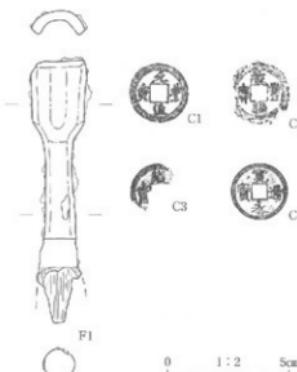
第42図 遺構外出土遺物（4）

坂長ヨコロ遺跡石器観察表

遺物 番号	検出 場所	遺構 層位	形 状	高 さ(cm)	幅 さ(cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	△保存長	
								石 材	備 考
S1 32	SK4	石塚	石塚	1.2	1.2	0.2	3.2	麻理石	
S2 36	SB1 埋土中	石塚	△1.9	1.8	0.3	1.7	サヌカイト		
S3 41	SX2 検出面	石塚	△2.5	△1.4	0.4	1.1	麻理石		
S4 41	1層	磨石	10.5	5.7	4.8	423.0	角閃石安山岩	翻石に転用	
S5 41	1層	敲石	9.2	6.5	6.1	590.0	花崗岩		
S6 41	遺構外	打撲石跡	13.1	10.2	3.4	680.0	テイサイト		
S7 42	1層	刃物(火鉛)	20.9	20.9	5.3	5,470.0	麻灰岩		

坂長ヨコロ遺跡鉄製品観察表

遺物 番号	検出 場所	遺構 層位	形 状	高 さ(cm)	幅 さ(cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	備 考
F1 43	埋土中	1層	10.9	2.6	1.2	58.4	木柄が保存	



第43図 遺構外出土遺物（5）

坂長ヨコロ遺跡銅線観察表

遺物 番号	検出 場所	遺構 層位	種 別	径 (cm)	法 厚 (cm)	重 量(g)	備 考
C1 43	1層	元筒素實	2.4	0.1	2.5	1076年鉛錫	
C2 43	遺構外	元筒素實	2.4	0.1	1.9	1376年鉛錫	
C3 43	1層	扁形素實	—	0.1	0.8	1394年鉛錫	
C4 43	1層	束水素實	2.3	0.1	2.2	吉賀承	

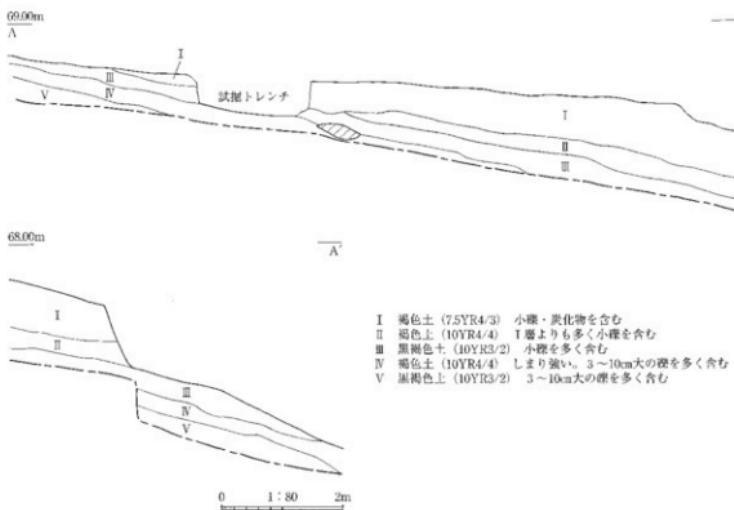
第5章 坂長熊谷遺跡の調査

第1節 1区の調査

1. 概要

1区は南から北へ延びる2つの尾根とその間の谷部に位置する。東側の尾根は比較的なだらかで、西側の尾根は急峻である。調査前は山林であった。かつては水田として利用されていたため、谷部は平坦に近い緩斜面となっており、北側は大きく段切りされている。

遺構は時期不明の土坑1基だけである。遺物は包含層から縄文土器、弥生土器、土師器、青磁、石鍋、鉄製品が出土している。



第44図 調査区土層断面図

尾根部では表上直下がローム層である一方、谷部では堆積層が厚く、最大で3.6mを測る。

谷部の基本的な層序は、以下のとおりである。I・II層が遺物包含層である。

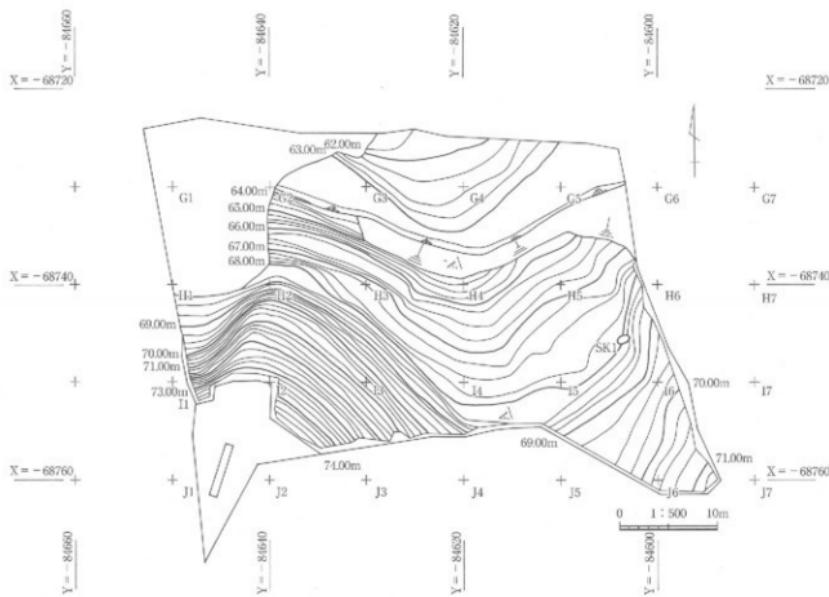
I層：褐色土。厚さ0.5~1.0m。縄文時代～中世の遺物を包含する。

II層：褐色土。厚さ0.2~0.4m。I層よりも多く小礫を含む。縄文時代～中世の遺物を包含する。

III層：黒褐色土。厚さ0.2~0.4m。小礫を多く含む。

IV層：褐色土。厚さ0.2~0.3m。しまりが強く、3~10cm大の礫を多く含む。

V層：黒褐色土。厚さ0.4m以上。



第45図 遺構分布図

2. 遺構

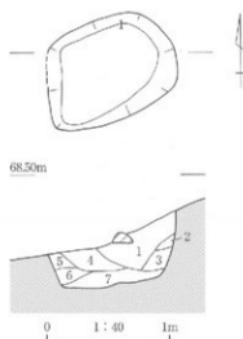
土坑 SK1 (第46図 図版27)

H6グリッド、標高68.0mの緩斜面に位置し、ローム層上面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸108cm、短軸84cm、深さ51cmを測る。遺物が出土していないため、時期は特定できない。

3. 遺構外出土遺物 (第47図 図版29・30)

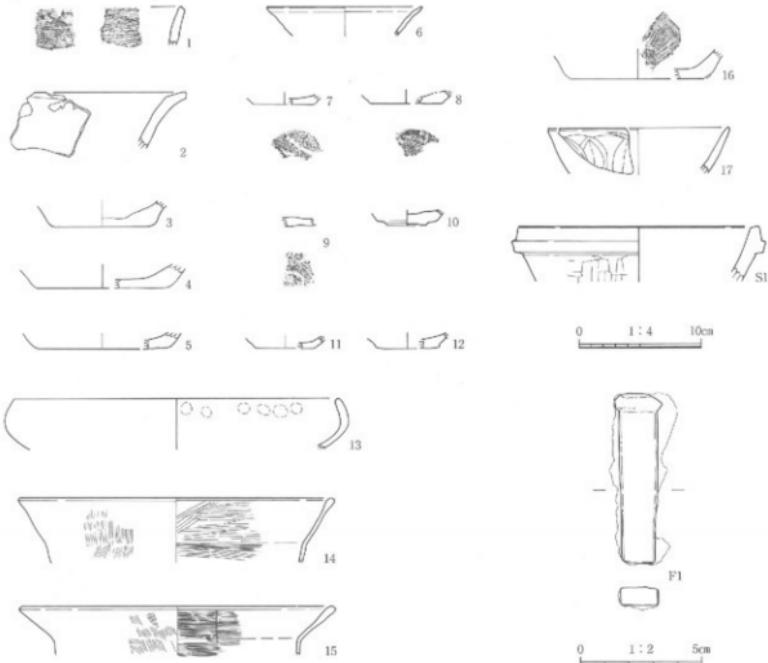
I・II層からは縄文時代～中世の遺物が出土した。I層とII層は識別が困難であったことから一括して取り上げた。

1は縄文土器の口縁部で、内外面とも条痕が施されている。2～5は弥生土器で、2は壺の口縁部。その他は中世の遺物である。6は坏身、7～12は皿である。14・15は鍋で、口縁部はく字状に屈曲し、端部が玉環状に肥厚する。いずれも外面には縱方向の、内面には横方向のハケ調整が施されている。16は瓦質の擂鉢。17は龍泉窯系青磁碗のI-5b類⁽¹⁾で、外面に運弁文を施す。S1は滑石製の石鍋で、口縁部外面には断面台形の鋸が巡る。胴部外面は幅5mm前後の鑿を用いて口縁部から底部に向かって3段程削り出しており、鋸部の上下縁には、鋸部を削り出した際の盤による沈線が明瞭に残る。内面は丁寧に磨かれている。胴部外面と口縁部内面には煤が付着している。木戸分類のIII-b類⁽²⁾に該当し、13世紀代に比定される。F1は頭部がT字状を呈しており、窓と考えられる。



- | |
|--------------------------------|
| 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 繙を含む |
| 2 褐褐色土 (10YR3/3) 繙を含む |
| 3 褐褐色土 (7.5YR3/3) |
| 4 褐褐色土 (7.5YR3/2) 繙を含む |
| 5 灰褐色土 (7.5YR4/2) ロームブロックを多く含む |
| 6 灰褐色土 (10YR3/4) ロームブロックを含む |
| 7 暗灰色土 (10YR4/1) ロームブロックを含む |

第46図 SK1



第47図 遺構外出土遺物

出土土器・磁器観察表

※復元値 △既存値

遺物 番号	同 名 字	地 質 層 位	種 別 類	口径(cm)	深 度(cm)	文様・記號	胎 土 質	色 調	備 考
1 47	G5	縄文土器 林	—	△3.2	—	外側：朱色 内面：朱漆	■(1~4mmの砂粒を含む) 良好	外壁：褐色 内壁：暗褐色	
2 47	G5	縄文土器 灰	—	△4.6	—	外側：漆地のため凹凸感不明 内面：漆地のため凹凸感不明	■(1mmの砂粒を含む) やや良	外壁：深赤褐色 内壁：深赤褐色	
3 47	H5	生土器 鹿角	Φ8.4	△1.7	—	外側：ナデ 内面：—	■(1~5mmの砂粒を含む) 良好	外壁：に少し褐色 内壁：に少し褐色	
4 47	H5	生土器 鹿角	Φ10.1	△1.5	—	外側：ナデ 内面：ナデ	■(1mm以下の砂粒を多く含む) 良好	外壁：褐色 内壁：褐色	外周黒削付無
5 47	G5	生土器 灰	Φ10.8	△1.3	—	外側：ナデ 内面：—	■(3mmの砂粒を含む) 良好	外壁：褐色 内壁：褐色	
6 47	H5	土器破 片	Φ12.7	△2.4	—	外側：羽根ナデ 内面：漆地のため凹凸感不明	■ 良	外壁：褐色 内壁：褐色	外周黒付無
7 47	H5	土器破 片	Φ5.0	△0.5	—	外側：漆地のため凹凸感不明 内面：—	■(1mmの砂粒を多く含む) 良好	外壁：褐色 内壁：褐色	
8 47	H5	土器破 片	Φ5.6	△1.1	—	外側：底盤み切り 内面：—	■(1mm以下の砂粒を多く含む) やや良	外壁：に少し褐色 内壁：に少し褐色	
9 47	H5	土器破 片	—	△0.6	—	外側：底盤み切り 内面：—	■ 良好	外壁：に少し褐色 内壁：に少し褐色	
10 47	H5	土器破 片	Φ5.0	△1.0	—	外側：底盤み切り 内面：漆地のため凹凸感不明	■(2~5mmの砂粒を含む) 良好	外壁：褐色 内壁：褐色	
11 47	G6	土器破 片	Φ5.0	△1.0	—	外側：底盤み切り 内面：—	■(1mm以下の砂粒を多く含む) 良	外壁：に少し褐色 内壁：に少し褐色	
12 47	H5	土器破 片	Φ5.2	△1.3	—	外側：底盤み切り 内面：—	■(1mm以下の砂粒を多く含む) 良	外壁：褐色 内壁：褐色	
13 47	G6	土器破 片か?	Φ26.5	△3.1	—	外側：ナデ 内面：漆地底痕	■(1mm以下の砂粒を含む) 良好	外壁：深褐色 内壁：深褐色	
14 47	H5	土器破 片	Φ25.5	△3.3	—	外側：ハケ 内面：—	■ 良好	外壁：に少し褐色 内壁：暗褐色	外周黒付無
15 47	H5	土器破 片	Φ25.5	△4.0	—	外側：ハケ 内面：—	■ 良好	外壁：に少し褐色 内壁：に少し褐色	
16 47	GG	瓦質土器 煙突	Φ11.1	△1.9	—	外側：漆地のため凹凸感不明 内面：ナデ、剥り目	■(1~2mmの砂粒を含む) 良	外壁：灰色 内壁：灰色	
17 47	GG	實底 灰	Φ14.9	△3.7	—	外側：漆芦文、施釉 内面：—	■ 良	外壁：オリーブ色 内壁：オリーブ色	焼成窯系

出土鉄製品観察表

遺物番号	発掘番号	遺構層位	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	法量	備考
F1	47	I・II層	鐵	7.0	2.6	1.1	36

出土石製品観察表

遺物番号	発掘番号	層位	種類	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	石材	備考
S1	47	I・II層	石錐	Φ19.8	—	△4.4	花崗岩	内外面に浮き石

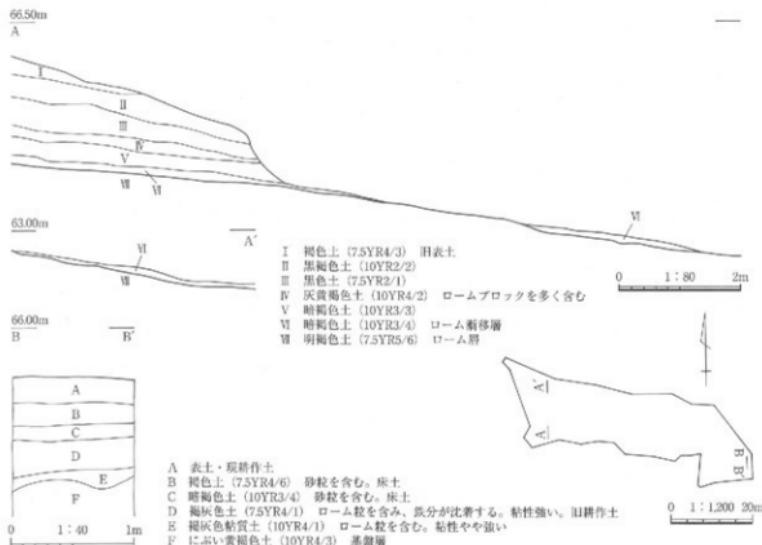
第2節 2区の調査

1. 概要

2区は南から北にのびる尾根とその両側の谷部に位置する。尾根部と谷部との比高差は約2~3mである。調査前は尾根部と西側の谷部は山林、東側の谷部は畑地で、かつては水田であった。そのため、尾根部と西側の谷部は段々状に、東側の谷部も厚く埋め立て造成されていた。

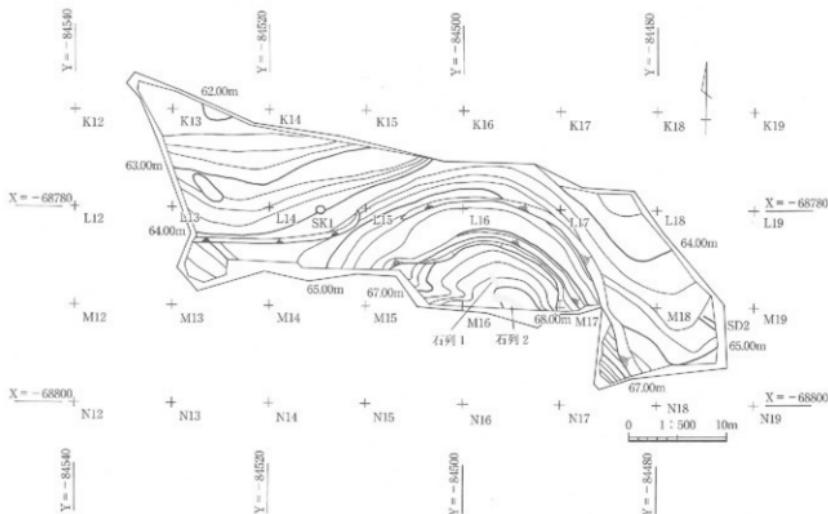
遺構は落とし穴1基、溝状遺構2基、石列2基を検出した。なお、調査区中央の尾根上には古墳の存在が想定されていたが、埋葬施設や周溝などは確認できず、遺物も出土しなかった。

遺物は表土や包含層(II層・E層)から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器が出土した。



第48図 調査区土層断面図

調査区内の堆積は、尾根部と西側の谷部では大部分で表土直下がローム層となる。南西側には遺物包含層(II層)が遺存する。北西側では削平によりV・VI層だけが遺る。一方、東側の谷部では耕作土が厚く、直下にローム層か基盤層がある。SD2周辺には僅かに遺物包含層(E層)が遺存する。



第49図 遺構分布図

2. 遺構

落とし穴 SK1 (第50図 図版28)

K15・L15グリッド、標高64.0mの尾根標部の緩斜面に位置し、ローム層上面で検出した。平面形は円形を呈し、径73×83cm、深さ95~103cmを測る。1層から縄文土器細片が出土した。底面ピットは確認できなかったが、規模や形態から縄文時代の落とし穴であろう。

溝状遺構 SD1 (第51図 図版27)

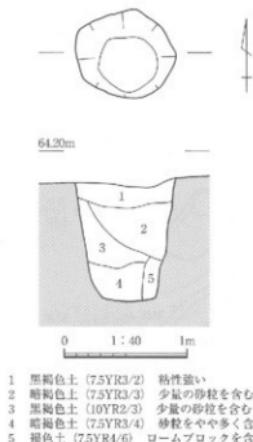
K14グリッド、標高63.0mの緩斜面に位置し、ローム層上面で検出した。北西方向に直線的にのび、検出した長さは3.9mで、幅1.1~1.4m、深さ2~9cmを測る。底面の標高は南東端が3cm高い。埋土は単層で、遺物は出土していない。

溝状遺構 SD2 (第51図 図版27)

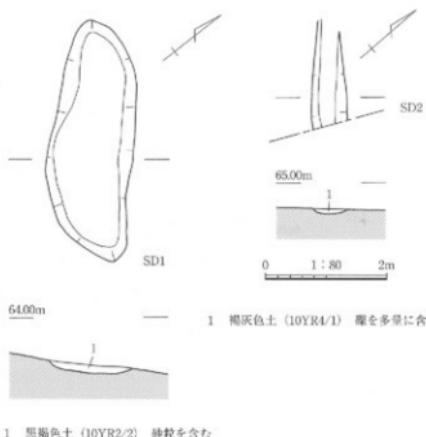
M19グリッド、標高64.5mの谷部の平坦面に位置し、基盤層上面で検出した。北西方向に直線的にのび、南東側は調査区外へと続く。検出した長さは1.9mで、幅37~59cm、深さ5~13cmを測る。底面の標高は南東端が8cm高い。埋土は単層で礫を多く含む。遺構内からは遺物が出土していないが、SD2を覆うE層から須恵器と土師器が出土している。

石列1 (第52図 図版28)

L17グリッド、標高68.0mの尾根上の平坦面に位置し、ローム層上面で検出した。やや湾曲して北西方向にのびており、長さ1.3m、幅23~40cmを測る。10~45cm大の角礫を12石用い、配列に規則性は認められない。時期は石の隙間に表土に由来する土が認められることと、周辺の出土遺物から近世後半以降と考えられる。



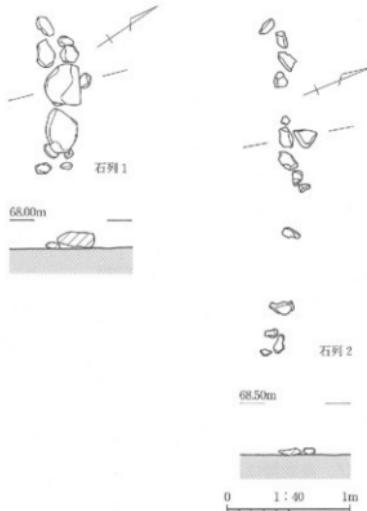
第50図 SK1



第51図 SD1・2

石列2（第52図 図版28）

L17グリッド、標高68.0mの尾根上の平坦面に位置し、ローム層上面で検出した。やや湾曲して西北西—東南東方向にのびており、長さ2.8m、幅16～31cmを測る。7～20cm大の角砾を15石用いているが、配列に規則性は認められない。石列1と同じ理由で近世後半以降のものと考えられる。



第52図 石列1・2

3. 遺構外出土遺物（第53図 図版29）

1は調査区西側のII層から出土した弥生土器の底部である。2～6は調査区中央の尾根部の表土から出土した。2は青磁碗、3は肥前系の磁器皿、4～6は陶器である。3は高台疊付部に砂が付着し、高台内にはハリ支え痕がある。4・5は灯明皿で、内面と口縁部外面が施釉されている。6は大皿あるいは鉢で、高台は削り出して成形し、見込みには環状に砂が付着している。

註

- (1) 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2
- (2) 木戸雅寿 1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX



第53図 遺構外出土遺物

出土遺物観察表

番号	発見 年号	通 構 置	種 別 器 種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	破 損 状 況	土 成	色 調	備 考	△復元前	△復元後
											△	△
1 53	L15 II層	赤陶土器 底深	—	△3.9 Φ7.1	—	外面:ナデ 内面:ナデ	密(1mm以下の粒程を多く含む) 角	外面:に少い黄褐色 内面:に少い黄褐色	—	—	—	—
2 53	L17	青磁 表土	桶	—	△4.0	外面:施釉 内面:施釉	密 良好	外面:オリーブ灰褐色 内面:オリーブ灰褐色	—	—	—	—
3 53	L17 表土	陶器 底	—	△3.0 Φ12.5	—	外面:施釉 内面:施釉	密 良好	外面:明褐色 内面:暗褐色	高台地部砂質 高台内ハリ支えあり	—	—	—
4 53	L17 表土	陶器 打削面	—	△1.5 Φ8.5	—	外面:施釉ナデ、口縁部施釉 内面:施釉	密 良好	施釉部:高褐色 施釉部:に少い黄褐色	—	—	—	—
5 53	L17 表土	陶器 打削面	—	1.8 Φ4.5	—	外面:四軒ナデ、口縁部施釉、底端周縁部凹り 内面:施釉	密 良好	底端部:海赤褐色 底端部:明赤褐色	底端部:明赤褐色 底端部:に少い黄褐色	—	—	—
6 53	M13 表土	陶器 底or縁	—	△2.5 Φ9.3	—	外面:ケズリ 内面:回転ナデ、縁付に跡が残る	密 良好	外縁:に少い黄褐色 内面:オリーブ黄褐色	見込み深掘法に砂付土	—	—	—

新旧遺構対照表

坂長ヨコロ遺跡		坂長熊谷遺跡2区	
新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SX1	1区 SX1	SK1	SK2
SX2	2区 SX1	SD1	SD3
		SD2	SD4

第6章　まとめ

平成20年度に発掘調査を実施した3遺跡からは、主に3時期の遺構と遺物が出土した。

縄文時代の落とし穴や土器がすべての遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡や円墳などが坂長ヨコロ遺跡と坂長下門前遺跡で見つかっている。

中世に関しては、3遺跡とも顕著な調査成果があった。坂長下門前遺跡3区では16世紀後半頃に普門寺に関係して設けられたと推定される土壘を調査した。坂長熊谷遺跡では石鍋や青磁などが出土している。坂長ヨコロ遺跡の遺構と遺物は多彩である。12世紀と15世紀の墓を検出し、後者からは備前焼の壺が出土した。古道や溜池の岸と考えられる地形も確認されている。青花磁器や朝鮮陶器などの輸入陶磁器をはじめ、石灯籠の部材や北宋銭、京都系土師皿など、急峻な斜面地には不似合いな遺物が出土している。

これら中世の遺構や遺物の性格を考察する上で重要なのは、賀茂神社と坂中氏であろう。賀茂神社は、現在は長者原台地上の字稻場にあるが、元は熊谷にあり、坂中丹波という人物が創建したという伝承が残っている。旧社地は地元では「古宮」と呼ばれ、坂長熊谷遺跡1区の南方約100m、標高100mの巨岩の前と伝えられる。折良く、平成21年10月に約50年ぶりの遷宮があり、賀茂神社のすべての棟札を読む機会があった。詳細は「坂長地区の歴史」に譲るが、最も古い棟札は慶長4年（1599）のもので、坂中九兵衛と坂中久右衛門の名が見える。次の寛文元年（1661）の棟札には、1枚目の要約があり、そこには坂中九兵衛と書かれるべき場所に「小村九兵衛」とある。以上から、賀茂神社は慶長4年に坂中九兵衛によって創建されたもので、坂中氏は本姓を小村氏といったと考えられる。

これまで、坂中氏については、永祿10年（1567）の杉原盛重から坂中弥六あての宛行状が唯一の文献であった。ただ、地元には、坂中丹波の墓などの伝承地がある。これは、江戸中期には成立していた小説『伯陽闘戰記』に登場する「坂中丹波」に由来している可能性がある。実際の坂中氏は、「丹波」を名乗ったかは分からぬが、弥六・九兵衛・久右衛門と継がれ、伝承の丹波にあたるのは九兵衛ということになる。おそらく戦国期かそれ以前から活躍した在地の有力な小領主で、関ヶ原の合戦後ごろに帰農したのであろう。

今回の調査で出土した中世の遺構や遺物には、坂中氏と関係があるものが含まれると思われる。熊谷の南方山上の字岩コゴロは伝坂中丹波の陣所であり、その墓は谷を挟んだ台地上の字五反林にある。坂中氏の居館跡は近くにある可能性が高い。また、坂長ヨコロ遺跡から出土した石灯籠や灯明皿は賀茂神社に関係する祠のもので、古道は溜池の岸を通って神社にむかう参道であったと推定される。問題は、賀茂神社が熊谷から現在の場所に遷った時期である。出土した最新の古銭が古寛永であることは、寛文年間ごろまでは祠があった可能性を示唆する。この事実は、棟札の調査から、賀茂神社が寛文元年に熊谷から現在地に遷宮されたと考えられることと整合する。

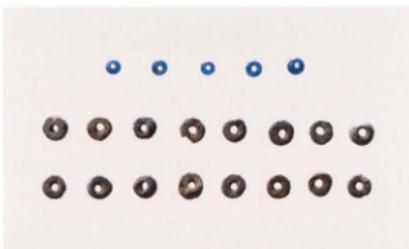
参考文献

賀茂神社遷宮実行委員会 2009『坂長地区の歴史』

図 版
PLATE



1 坂長35号墳出土土器



2 坂長35号墳出土玉類

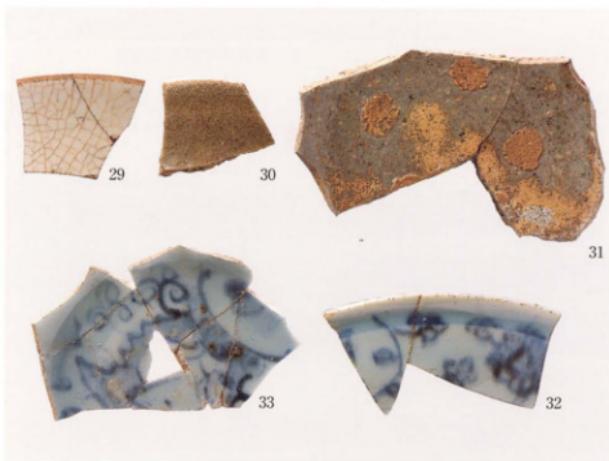


3 坂長35号墳棺痕跡（北から）

図版 2 坂長ヨコロ遺跡



1 坂長ヨコロ遺跡SX1出土備前焼壺



2 坂長ヨコロ遺跡出土陶磁器



1 調査地周辺の地形（南東から）



2 調査地周辺の地形（上が北）

図版4 坂長下門前遺跡2区



1 SK1完掘状況（西から）



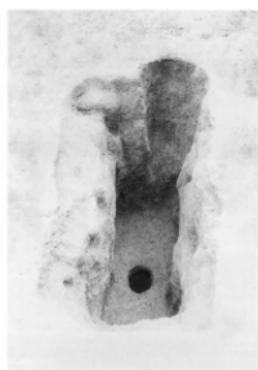
2 SK2完掘状況（南から）



3 SK3完掘状況（東から）



4 SK4完掘状況（南から）



5 SK5完掘状況（西から）



6 SK8完掘状況（東から）



7 SK7完掘状況（北から）



8 SK9完掘状況（東から）



1 SK10土層断面（北から）



2 SK3底面杭痕跡検出状況（南から）



3 調査区完掘状況（西から）

図版6 坂長下門前遺跡3区



1 調査地周辺の地形（南東から）



2 調査地周辺の地形（北西から）

図版7 坂長下門前遺跡3区

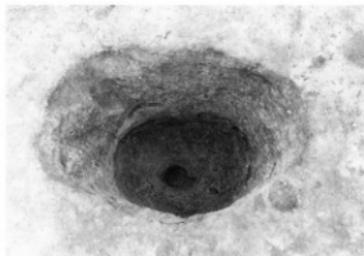


1 調査地全景
(北東から)

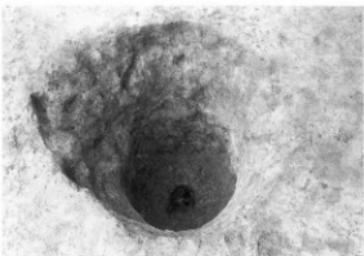


2 調査地全景
(上が北)

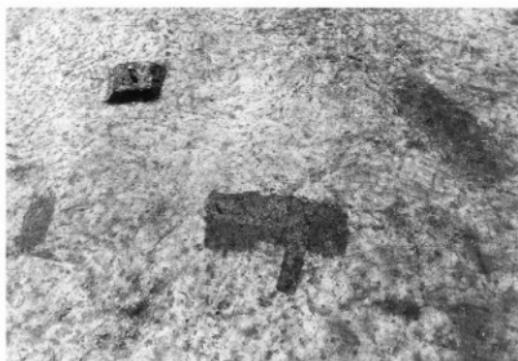
図版8 坂長下門前遺跡3区



1 SK1完掘状況（南から）



2 SK2完掘状況（東から）



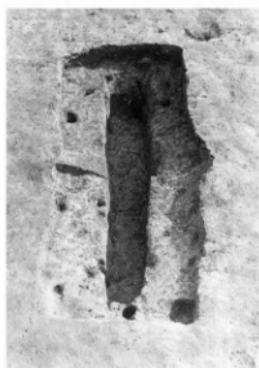
3 SK6～SK8検出状況（北から）



4 SK6土器出土状況（東から）



5 SK7土層断面（北東から）



6 SK7完掘状況（北から）

図版9 坂長下門前遺跡3区



1 土壘全景（西から）



2 SD2発掘状況（東から）



3 土壘土層断面（東から）

図版10 坂長下門前遺跡3区



1 SK6出土土器



2 3区出土土器 (1)



3 3区出土土器 (2)



4 3区出土石器



5 土壙出土古銭



1 坂長35号墳全景（上が北）

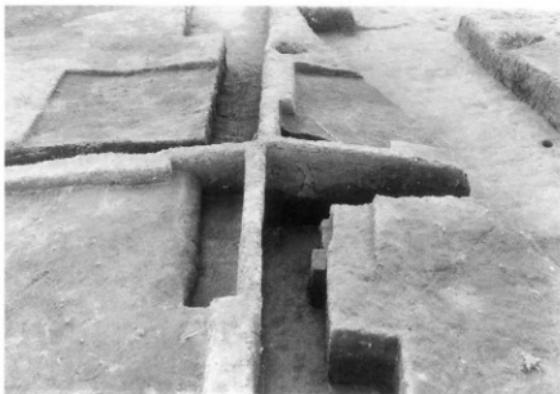


2 坂長35号墳（東から）

図版12 坂長35号墳



1 棺痕跡検出状況
(北から)



2 棺痕跡完掘状況
(北から)



3 棺痕跡土層断面
(北から)



1 墓壇完掘状況
(北から)



2 墓丘除去後の状況
(東から)



3 墓頂土器出土状況
(東から)

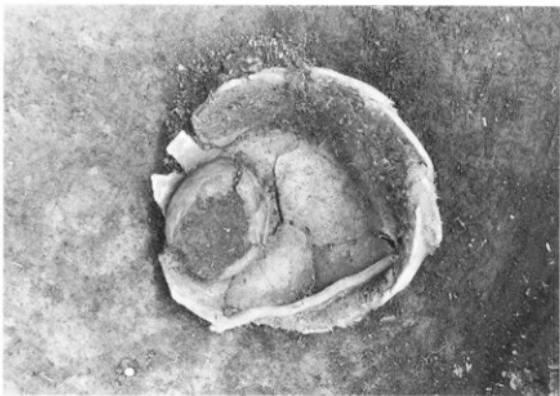
図版14 坂長35号墳



1 周溝土器出土状況（1）
(南から)



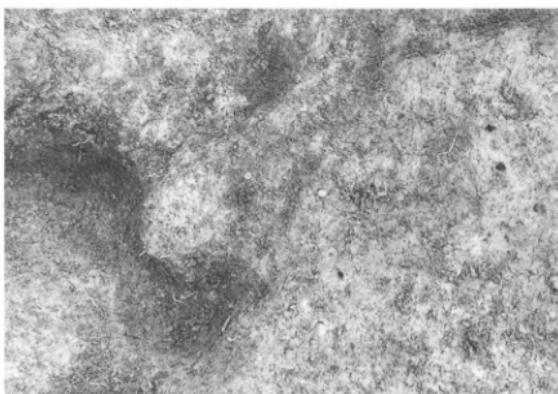
2 周溝土器出土状況（2）
(南から)



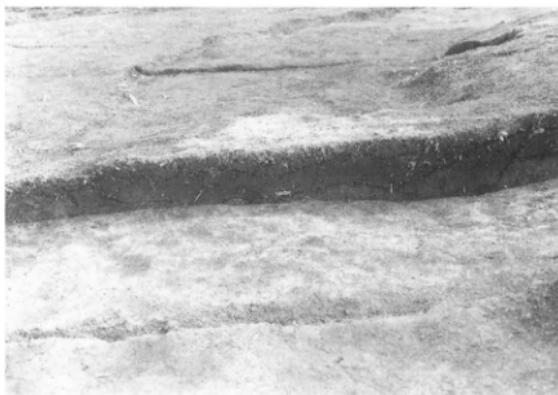
3 周溝土器出土状況（3）
(北から)



1 周溝土器出土状況（4）
(南から)



2 周溝玉類出土状況
(東から)



3 周溝土層断面
(西から)

図版16 坂長35号墳



出土土器

図版17 坂長ヨコロ遺跡



1 調査地周辺の地形
(西から)



2 調査地周辺の地形
(北西から)

図版18 坂長ヨコロ遺跡

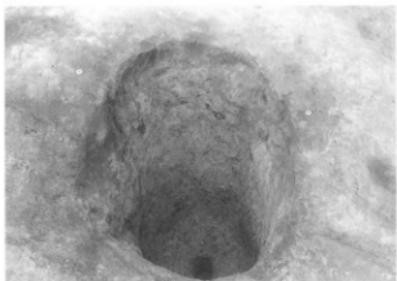


1 1区調査終了状況（南東から）

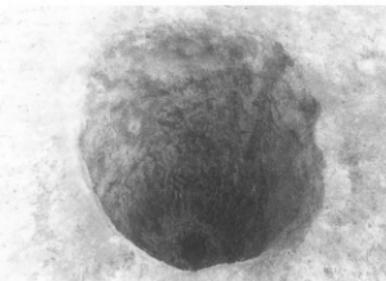


2 2区調査終了状況（東から）

図版19 坂長ヨコロ遺跡



1 SK1完掘状況（東から）



2 SK2完掘状況（北から）



3 SX1検出状況
(東から)



4 SX1完掘状況
(南東から)

図版20 坂長ヨコロ遺跡



1 SX2墓壙検出状況
(北東から)



2 SX2土層断面
(北から)



3 SX2完掘状況
(北から)

図版21 坂長ヨコロ遺跡



1 SI1床面検出状況
(北から)



2 SI1土層断面
(南東から)



3 SI1床面土器出土状況
(北から)



4 SI1完掘状況
(北から)

図版22 坂長ヨコロ遺跡



2



6



3

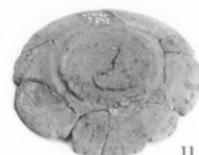


8

1 SI1出土土器



10



11

2 SX2出土土器



21



24

27

28

3 遺構外出土土器（1）

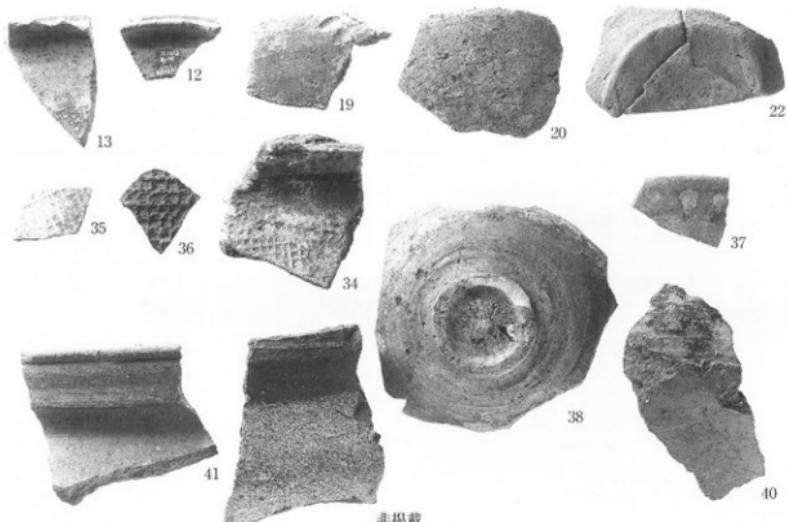


16



17

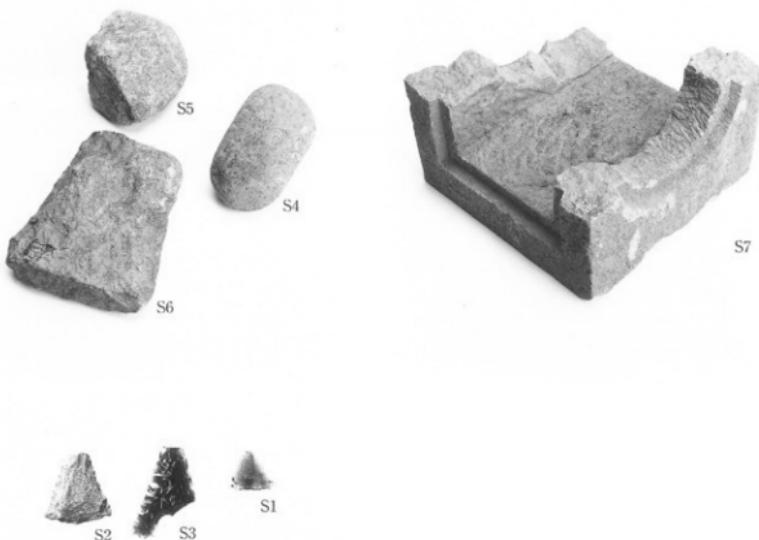
18



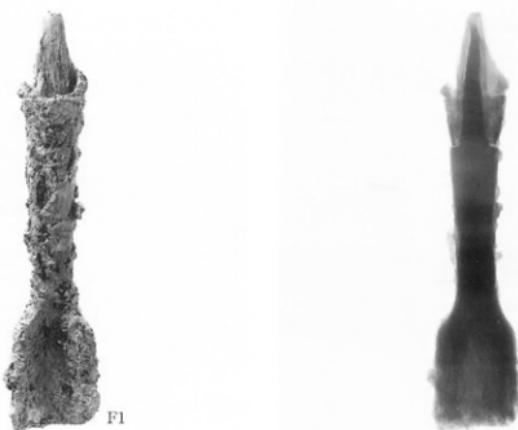
非掲載

遺構外出土土器（2）

図版24 坂長ヨコロ遺跡



1 出土石器・石製品



2 出土鉄製品およびX線画像



1 1区調査前の状況
(北から)



2 1区調査終了状況 (西から)

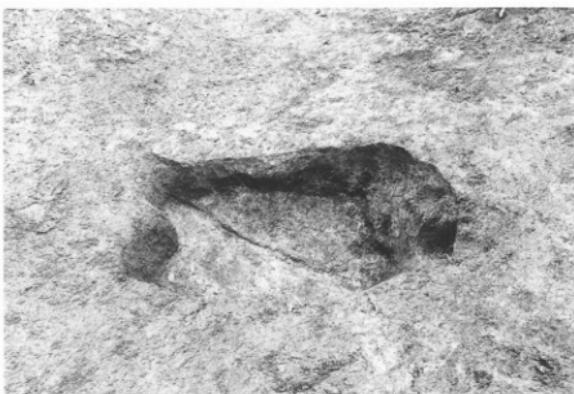
図版26 坂長熊谷遺跡



1 2区調査前の状況
(北から)



2 2区調査終了状況 (西から)



1 1区SK1完掘状況
(南から)



2 SD1完掘状況
(南東から)



3 SD2完掘状況
(西から)

図版28 坂長熊谷遺跡



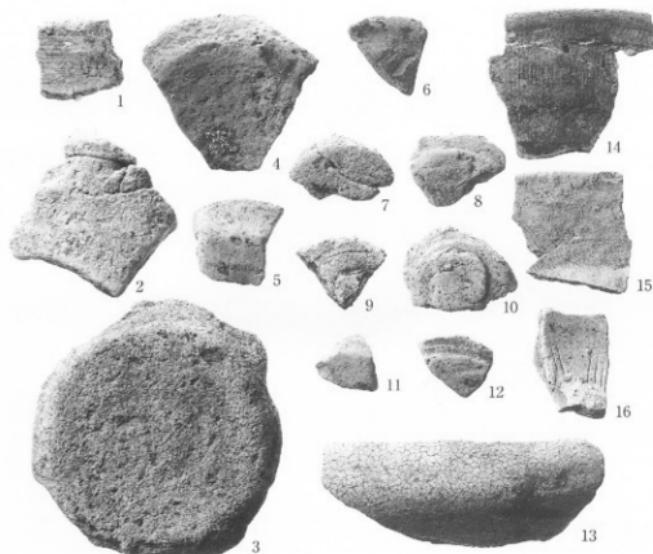
1 2区SK1完掘状況
(南から)



2 石列1 (東から)



3 石列2 (西から)



1 1区出土土器



2 2区出土土器

図版30 坂長熊谷遺跡



17



S1

1 1区出土青磁

2 1区出土石鍋



F1



3 鉄器およびX線画像

報告書抄録

ふりがな	さかちょうしもんぜんいせき2 さかちょうよろいせき さかちょうくまたにいせき						
書名	坂長下門前遺跡2 坂長ヨコロ遺跡 坂長熊谷遺跡						
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	V						
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書						
シリーズ番号	114						
編著者名	高橋 浩樹 高橋 章司 坂本 嘉和						
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室						
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 TEL (0867) 51-7552						
発行年月日	西暦2010年(平成22年)3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
坂長下門前遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町坂長	31390	1-370	35° 22' 39"	133° 23' 39"	20080324 ~ 20080529	3600m ²
坂長35号墳	鳥取県西伯郡伯耆町坂長 字下門前2017はか	31390	1-227	35° 35" 35"	133° 23' 56"	20080724 ~ 20081104	4500m ²
坂長ヨコロ遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町坂長 字ヨコロ1888はか	31390	1-374	35° 22' 35"	133° 23' 56"	20080617 ~ 20080820	2420m ²
坂長熊谷遺跡	鳥取県西伯郡伯耆町坂長 字熊谷1854はか	31390	1-375	35° 22' 35"	133° 23' 08"	20080908 ~ 20081203	2780m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
坂長下門前遺跡	その他の遺跡	縄文時代 古墳時代 中～近世	落とし穴 墓 上塁	15基 3基 1条	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、古鏡		
坂長35号墳	古墳	古墳時代中期	円墳	1基	土師器、須恵器、滑石製玉、ガラス玉	坂長下門前遺跡3区内	
坂長ヨコロ遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 中世	落とし穴 堅穴住居 墓	4基 1棟 2基	縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、石灯籠火袋、古鏡	備前燒亞	
坂長熊谷遺跡	その他の遺跡	縄文時代 近世以降 時期不明	落とし穴 石列 溝	1基 2条 2条	縄文土器、陶磁器、石器		

鳥取県教育文化財団調査報告書 114
一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡2

さか ちょう しも もん ぜん い せき
坂 長 ヨコロ 遺 蹤

さか ちょう くま たに い せき
坂 長 熊 谷 遺 蹤

発行 2010年3月19日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地

電話 (0857) 51-7552

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 勝美印刷株式会社